

千葉県文化財センター

研 究 紀 要

20

平成 12 年 3 月

財団法人 千葉県文化財センター

発刊の辞

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年11月の創立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究、普及活動を実施してまいりました。その成果は、発掘調査報告書をはじめとする多数の刊行物等に見られるとおりです。

研究活動につきましては、研究紀要の刊行をはじめ、埋蔵文化財調査に関連する独自の研究事業を行ってまいりました。昭和51年度に第1号を刊行しました研究紀要は、第1期から第3期の共通テーマによる調査・研究の成果として14冊を刊行いたしました。さらに「創立10周年記念論集」、「創立20周年記念論集」として研究紀要10号・16号を、県内出土の青銅製品の生産と流通の実態を明らかにした「県内の青銅製品の集成と分析」を17号として、それぞれ刊行いたしました。

当センターでは、昭和56年度以来、千葉県教育委員会の委託を受け、古代寺院跡・中近世城館跡・貝塚・古墳等を対象とする国庫補助事業重要遺跡確認調査を継続して実施してまいりました。そこで、その成果の検討を、研究紀要の第4期の共通テーマとすることとし、「重要遺跡確認調査の成果と課題」と題して、平成5年度から共同研究を開始いたしました。平成9年度には、その成果報告の第1冊目として研究紀要18号「古代仏教遺跡の諸問題」を平成10年度には研究紀要19号「貝塚出土資料の分析」をそれぞれ刊行いたしました。

このたび、第3冊目として研究紀要20号「中近世城館跡の構造と特質」を刊行いたします。本書が、考古学研究はもとより、埋蔵文化財調査の技術向上のための資料として、広く活用されることを期待してやみません。

平成12年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 中村好成

目 次

中近世城館跡の構造と特質

— 重要遺跡確認調査の成果と課題 3 —

はじめに	3
序 章	7
第1節 はじめに	7
第2節 城館をめぐる房総の中近世史	10
第3節 研究史概要	23
第1章 城館の構造等について	33
第1節 データについて	33
第2節 地域別特色	147
第3節 地域、時期、城・城主クラス別特色	154
第4節 まとめと課題	177
第2章 検出遺構について	183
第1節 障子堀の分類と編年	183
第2節 地下式坑のデータ分析	191
第3章 出土遺物について	215
第1節 はじめに	215
第2節 千葉県および周縁の土器研究史	216
第3節 所収遺跡の概説と出土土器	222
第4節 土器編年	278
第5節 まとめと課題	303
付章 文献目録	311

挿図目次

序-2 城館をめぐる房総の中近世史

第1図	千葉県内中近世城館跡分布	11
第2図	房総の戦国末期主要城館分布	17
第3図	近世初期(天正18年後半)の房総の諸土	20
第4図	千葉県地形分類図	21

1-1 データについて

第5図	千葉県地域・市町村区分図	37
第6図	北西部の中近世城館跡分布	38
第7図	北部中央の中近世城館跡分布	39
第8図	北東部の中近世城館跡分布	40
第9図	中央西部の中近世城館跡分布	41
第10図	中央東部の中近世城館跡分布	42
第11図	南部の中近世城館跡分布	43
第12図	野田市金井野城跡(1)概念図	62
第13図	柏市松ヶ崎城跡(3)概念図	62
第14図	鎌ヶ谷市佐津間城跡(10)概念図	63
第15図	柏市戸張城跡(2)概念図	64
第16図	柏市増尾城跡(4)測量図	64
第17図	我孫子市根戸城跡(5)概念図	65
第18図	沼南町箕輪城跡(9)概念図	65
第19図	松戸市小金城跡(6)概念図	66
第20図	佐倉市大篠塚城跡(37)概念図	67
第21図	四街道市池ノ尻館跡(45)発掘調査全測図	67
第22図	印西市小林城跡(12, 15)発掘調査全測図	68
第23図	本埜村笠神城跡(16)概念図	68
第24図	印旛村師戸城跡(18)概念図	69
第25図	印旛村高田山城跡(17)概念図	69
第26図	成田市荒海城跡(24)概念図	70
第27図	成田市長沼城跡(23)概念図	70
第28図	成田市駒井野城跡(25)概念図	71
第29図	成田市東和田城跡(22)発掘調査全測図	71
第30図	佐倉市太田要害城跡(36)概念図	72
第31図	佐倉市小篠塚城跡(31)概念図	72
第32図	佐倉市白井田宿内砦跡(35)概念図	73

第 33 図	四街道市鹿渡城跡(39)測量図	73
第 34 図	四街道市福星寺館跡(43)概念図	74
第 35 図	四街道市木出城跡(40)概念図	74
第 36 図	四街道市古屋城跡(38)・北ノ作遺跡(42,44)測量図・概念図	75
第 37 図	四街道市北ノ作遺跡(42,44)発掘調査全測図	75
第 38 図	四街道市和良比堀込城跡(41)発掘調査全測図	76
第 39 図	酒々井町長勝寺脇館跡(49)発掘調査全測図	76
第 40 図	酒々井町本佐倉城跡(47)・向根古屋城跡(48)概念図	77
第 41 図	佐倉市白井城跡(26)周辺概念図	78
第 42 図	佐倉市岩富城跡(27)測量図	79
第 43 図	佐倉市佐倉城跡(28)概念図	80
第 44 図	千葉市南屋敷遺跡(67)発掘調査全測図	81
第 45 図	千葉市城の腰城跡(61)測量図	81
第 46 図	千葉市立堀城跡(66)概念図	82
第 47 図	千葉市城山城跡(62)測量図	82
第 48 図	千葉市高品城跡(58)発掘調査全測図	83
第 49 図	千葉市小弓城跡(57)概念図	84
第 50 図	千葉市生実城跡(56)概念図	85
第 51 図	千葉市御茶屋御殿跡(63)発掘調査全測図	86
第 52 図	神崎町小松城跡(75)概念図	87
第 53 図	佐原市鶴崎新タテ古タテ城跡(83)概念図	87
第 54 図	佐原市上小川城跡(89)概念図	88
第 55 図	佐原市大倉城跡(85)概念図	88
第 56 図	山田町府馬城跡(101)概念図	89
第 57 図	東庄町大友城跡(105)概念図	89
第 58 図	下総町名木城跡(72)概念図	89
第 59 図	下総町小帝城跡(70)概念図	90
第 60 図	神崎町武田城跡(74)概念図	90
第 61 図	大栄町津富浦城跡(80)概念図	90
第 62 図	大栄町久井崎城跡(77)概念図	91
第 63 図	大栄町南敷城跡(82)概念図	91
第 64 図	大栄町馬洗城跡(79)発掘調査全測図	91
第 65 図	佐原市山崎城跡(86)測量図	92
第 66 図	佐原市下小野城跡(87)概念図	92
第 67 図	多古町並木城跡(91)概念図	93
第 68 図	小見川町上小堀城跡(99)概念図	93
第 69 図	下総町名古屋城跡(68)概念図	94

第70図	干潟町鎬木城跡(103)測量図	94
第71図	東庄町沼闕城跡(104)概念図	95
第72図	下総町助崎城跡(69)測量図	95
第73図	小見川町森山城跡(97)概念図	96
第74図	小見川町須賀山城跡(98)概念図	96
第75図	佐原市大崎城(矢作城)跡(84)概念図	96
第76図	光町篠本城跡(108)発掘調査全測図	97
第77図	八日市場市大堀城跡(112)測量図	98
第78図	八日市場市飯塚砦跡(116)概念図	98
第79図	海上町見廣城跡(117)概念図	98
第80図	八日市場市大浦城跡(114)概念図	99
第81図	八日市場市久方城跡(110)概念図	99
第82図	八日市場市新城跡(115)概念図	100
第83図	銚子市中島城跡(118)測量図	100
第84図	芝山町岩山城跡(124)概念図	101
第85図	山武町埴谷周路遺跡(126)発掘調査全測図	101
第86図	東金市田間城跡(133)概念図	101
第87図	千葉市大椎城跡(136)概念図	102
第88図	芝山町山中北城跡(122)・南城跡(123)概念図	102
第89図	成東町津辺城跡(131)概念図	103
第90図	大網白里町小西城跡(137)概念図	103
第91図	大網白里町大網城跡(138)概念図	104
第92図	松尾町山室城跡(128)概念図	104
第93図	芝山町大台城跡(120)概念図	105
第94図	芝山町田向城跡(121)概念図	105
第95図	芝山町飯櫃城跡(119)測量図	106
第96図	横芝町坂田城跡(129)概念図	106
第97図	東金市東金城跡(132)測量図	107
第98図	千葉市土気城跡(135)概念図	107
第99図	松尾町松尾城(127)計画図	108
第100図	長南町下芝原城跡(151)概念図	109
第101図	睦沢町碓城跡(155)概念図	109
第102図	茂原市小林城跡(144)概念図	110
第103図	長南町利根里城跡(149)概念図	110
第104図	茂原市石神城跡(143)概念図	111
第105図	長柄町榎本城跡(139)概念図	111
第106図	長南町根古屋城跡(150)概念図	112

第107図	長柄町立鳥城跡(140)概念図	112
第108図	茂原市真名宿谷城跡(146)概念図	112
第109図	一宮町一宮城跡(157)概念図	112
第110図	睦沢町勝見城跡(153)概念図	113
第111図	睦沢町高藤山城跡(156)概念図	113
第112図	茂原市本納城跡(141)概念図	114
第113図	茂原市真名城跡(142)測量図	115
第114図	長南町長南城跡(148)概念図	116
第115図	岬町中滝城跡(164)測量図	117
第116図	御宿町最明寺裏城跡(169)概念図	117
第117図	夷隅町大野城跡(160)測量図	118
第118図	岬町矢竹城跡(163)概念図	118
第119図	岬町鶴か城跡(162)概念図	119
第120図	大原町城谷城跡(166)概念図	120
第121図	大原町金山城跡(167)概念図	121
第122図	大原町布施殿台城跡(165)概念図	122
第123図	勝浦市興津城跡(172)概念図	122
第124図	勝浦市吉尾城跡(170)概念図	123
第125図	勝浦市勝浦城跡(171)概念図	123
第126図	夷隅町万喜城跡(159)概念図	124
第127図	大多喜町大多喜城跡(158)概念図	125
第128図	市原市平蔵城跡(180)・平蔵城部田城跡(183)概念図	126
第129図	市原市吉沢城跡(181)概念図	126
第130図	市原市犬成城跡(176)・犬成向山城跡(179)概念図	127
第131図	市原市池和田城跡(177)概念図	127
第132図	市原市雀ヶ崎城跡(182)概念図	128
第133図	市原市真ヶ谷城跡(175)概念図	128
第134図	市原市椎津城跡(174)概念図	129
第135図	市原市分目要害城跡(178)概念図	129
第136図	市原市佐是城跡(173)概念図	130
第137図	袖ヶ浦市高谷館群(185,186)概念図	131
第138図	木更津市三直城跡(197)概念図	131
第139図	木更津市笹子城跡発掘調査全測図	132
第140図	木更津市中尾城跡(192)概念図	133
第141図	木更津市天神台城跡(191)概念図	133
第142図	木更津市要害城跡(190)概念図	133
第143図	富津市天神山城跡(203)概念図	134

第144図	君津市秋本城（小糸城）跡(195)概念図	134
第145図	君津市千本城跡(194)概念図	134
第146図	富津市峰上城跡(200)概念図	135
第147図	富津市造海城（百首城）跡(201)測量図	135
第148図	木更津市真里谷城跡(188)概念図	136
第149図	木更津市真武根陣屋跡(189)概念図	136
第150図	富津市飯野陣屋跡(198)測量図	137
第151図	君津市久留里城跡(193)概念図	137
第152図	富津市佐貫城跡(199)概念図	138
第153図	鋸南町下ノ坊館跡(204)発掘調査全測図・館域推定図	139
第154図	鴨川市西郷氏館跡(209)発掘調査全測図	140
第155図	丸山町石堂城跡(208)概念図	141
第156図	千倉町宇田城跡(216)概念図	141
第157図	館山市稲村城跡(214)測量図	142
第158図	館山市山本城跡(215)概念図	143
第159図	富山町富山城跡(205)概念図	143
第160図	鴨川市山之城城跡(211)・藤四郎台館跡(210)概念図	144
第161図	富浦町宮本城跡(207)概念図	144
第162図	天津小湊町葛ヶ崎城跡(212)概念図	145
第163図	富浦町岡本城跡(206)測量図	146
第164図	館山市館山城跡(213)概念図	146

1-2 地域別特色

第165図	地域別データグラフ1（立地他）	149
第166図	地域別データグラフ2（曲輪数他）	150
第167図	地域別データグラフ3（堀長さ他）	151

1-3 地域、時期、城・城主クラス別特色

第168図	地域、時期、城・城主クラス別曲輪数	157
第169図	地域、時期、城・城主クラス別曲輪面積	158
第170図	地域、時期、城・城主クラス別堀数	159
第171図	地域、時期、城・城主クラス別堀・土塁長さ	160
第172図	地域、時期、城・城主クラス別特殊構造	161
第173図	地域、時期、城・城主クラス別地名	162

2-1 障子堀の分類と編年

第174図	障子堀分類模式図	185
-------	----------	-----

2-2 地下式坑のデータ分析

第175図	地下式坑主室面積	208
第176図	地下式坑深さ	209

第177図	地下式坑段差	209
3-2 千葉県および周縁の土器研究史		
第178図	所収遺跡位置図	221
3-3 所収遺跡の概説と出土土器		
第179図	文脇遺跡	222
第180図	外箕輪遺跡	223
第181図	下ノ坊遺跡B地点	224
第182図	天神前遺跡	224
第183図	荒久遺跡	226
第184図	台遺跡	227
第185図	神田遺跡	227
第186図	真里谷城跡	228
第187図	椎津城跡	229
第188図	久留里城跡	229
第189図	村上遺跡	230
第190図	野乃間古墳	230
第191図	富津陣屋跡	231
第192図	飯野陣屋跡	232
第193図	岩川遺跡	232
第194図	神田山第Ⅲ遺跡	233
第195図	山室城跡	233
第196図	田向城跡	234
第197図	一宮城城之内遺跡	235
第198図	大多喜城跡	236
第199図	山中台遺跡	236
第200図	古宿・上谷遺跡	237
第201図	上宿遺跡	238
第202図	長倉宮脇遺跡	239
第203図	西屋敷遺跡	239
第204図	千葉城跡	240
第205図	廿五里城跡	241
第206図	生実城跡	241
第207図	高品城跡	242
第208図	南屋敷遺跡	243
第209図	井戸向遺跡	243
第210図	黒ハギ遺跡	244
第211図	根木内遺跡第4地点	244

第212図	小金城跡	245
第213図	鹿島前遺跡	246
第214図	三輪ノ山第Ⅲ遺跡	246
第215図	花前Ⅱ-1遺跡	247
第216図	駒井野西ノ下遺跡	247
第217図	小林城跡	248
第218図	高岡大福寺遺跡	249
第219図	駒井野荒追遺跡	250
第220図	北ノ作遺跡	250
第221図	池ノ尻館跡	252
第222図	和良比堀込城跡	253
第223図	臼井城跡	254
第224図	本佐倉城跡	256
第225図	長勝寺脇館跡	256
第226図	佐倉城跡	258
第227図	烏内遺跡	260
第228図	南広遺跡	260
第229図	弥勒東台遺跡	261
第230図	曲輪ノ内遺跡(1次)	261
第231図	内野遺跡	262
第232図	篠本城跡	263
第233図	神代夏方遺跡	264
第234図	吉原三王遺跡	265
第235図	大六天遺跡	266
第236図	大堺・塔ノ前遺跡	267
第237図	馬洗城	268
第238図	綱原屋敷跡遺跡	268
第239図	久井崎城跡	269
第240図	高岡陣屋跡	270
第241図	守谷城跡	271
第242図	葛西城(1~20)、柴又帝釈天遺跡(21~23)、上千葉遺跡(24~28)	273

3-4 土器編年

第243図	カワラケ(安房・君津・市原)	281
第244図	カワラケ(山武・長生・夷隅)	282
第245図	カワラケ(千葉・八千代)	283
第246図	カワラケ(印旛(1))	284
第247図	カワラケ(印旛(2))	285

第248図	カワラケ (香取・海上・匠瑳)	286
第249図	カワラケ (東葛飾・守谷城・葛西城)	287
第250図	カワラケ (全県下)	288
第251図	内耳土器・土器播鉢 (上総)	293
第252図	内耳土器・土器播鉢 (千葉・八千代・東葛飾)	293
第253図	内耳土器・土器播鉢 (印旛)	294
第254図	内耳土器 (香取・海上・匠瑳)	294
第255図	土器播鉢・土釜 (香取・海上・匠瑳)	295
第256図	内耳土器 (佐倉城)	296
第257図	内耳土器 (印旛・香取)	297
第258図	内耳土器 (上総)	298
第259図	内耳土器 (東葛飾)	299
第260図	両角分類図	300
第261図	深鉢型土器	302

表目次

序-2 城館をめぐる房総の中近世史

第1表	千葉県内中近世城館関係年表	12
第2表	戦国末期房総の勢力分布	16
1-1 データについて		
第3表	千葉県内中近世城館跡 構造・地名・時期等データ	44
1-2 地域別特色		
第4表	千葉県内中近世城館跡構造等 地域別データ集計	148
1-3 地域、時期、城・城主クラス別特色		
第5表	千葉県内中近世城館跡構造等 地域、時期、城・城主クラス別データ	155
2-1 障子堀の分類と編年		
第6表	全国の城館検出障子堀形態	187
第7表	障子堀の出現時期 (案)	188
2-2 地下式坑のデータ分析		
第8表	地下式坑一覧	196
第9表	地下式坑出土遺物	206
第10表	地下式坑検出遺跡一覧	207
3-3 所収遺跡の概説と出土土器		
第11表	所収遺跡一覧	275

3-5 まとめと課題

第12表 近世城館跡・陣屋跡の調査経歴	308
---------------------------	-----

付 文献目録

第13表 文献目録①（自治体史）	312
第14表 文献目録②（雑誌・定期刊行物）	313
第15表 文献目録③（発掘・測量調査報告書）	320
第16表 文献目録④（単行本）	325
第17表 文献目録⑤（第3章参考論文）	330

図版目次

図版 1

1. 松戸市小金城跡 金杉口畝状空堀
2. 印西市小林城跡 I 郭虎口門跡

図版 2

1. 印西市小林城跡 II 郭虎口門跡（I期）
2. 印西市小林城跡 II 郭虎口門跡（II期）

図版 3

1. 四街道市館ノ山遺跡 航空写真
2. 四街道市館ノ山遺跡 台地整形区画内

図版 4

1. 四街道市北ノ作遺跡 航空写真（台地上）
2. 四街道市北ノ作遺跡 航空写真（斜面部）

図版 5

1. 四街道市北ノ作遺跡 航空写真（真上から）
2. 四街道市北ノ作遺跡 斜面部

図版 6

1. 四街道市和良比堀込城跡 近景
2. 酒々井町長勝寺脇館跡 航空写真

図版 7

1. 千葉市高品城跡 航空写真
2. 千葉市生実城跡 番後台地区畝堀

図版 8

1. 千葉市千葉御茶屋御殿跡 航空写真
2. 大栄町久井崎城跡 航空写真

図版 9

1. 光町篠本城跡 航空写真
2. 芝山町田向城跡 航空写真

図版10

1. 横芝町坂田城跡 航空写真
2. 長南町岩川館跡 航空写真

図版11

1. 木更津市笹子城跡 北端部 航空写真
2. 富津市造海城跡 航空写真

図版12

1. 富津市富津陣屋跡 航空写真
2. 鴨川市西郷氏館跡 航空写真

中近世城館跡の構造と特質

— 重要遺跡確認調査の成果と課題 3 —

はじめに

資料部長 阪田正一

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年に創立以来、埋蔵文化財の発掘調査及びこれに関連する研究事業・普及事業を主要な業務として実施している。研究活動については、発掘調査の現場で、また、報告書の作成過程でと、日々の業務の中でも行われていると言えるが、センターとして共通したテーマのもとに共同研究を継続して実施しており、その成果は『千葉県文化財センター研究紀要』として逐次刊行してきたところである。

『研究紀要』は、文字どおり当センター職員の研究成果を世に問うものであり、昭和51年に第1号を刊行して以来号を重ね、本書で20号を数えるに至った。この間、昭和61年3月に創立10周年記念論集（第10号）を、平成7年1月に創立20周年記念論集（第16号）を、それぞれ論文集として刊行した以外は共通テーマを設定したシリーズとして刊行している。以下、各シリーズのテーマと目的、研究内容について記しておく。第1期（第1号～第5号）は、昭和50年度から55年度にかけて、「考古学から見た房総文化の解明」という主題のもとに資料の集成を行い、原始古代における房総地域の文化について、時代ごとに解明することを試みた。第2期（第6号～第9号、第11号）は、「自然科学の手法による遺跡・遺物の研究」というテーマで、自然科学的分析方法の考古学分野への応用に関する問題について研究し、その成果を昭和56年度から61年度にかけて刊行した。第3期（第12号～第15号）は、「生産遺跡の研究」をテーマとして、生産・流通・消費に関する諸問題について、考古学のみならず様々な視点から検討を加え、昭和62年度から平成6年度までに4冊を刊行した。また、共通テーマによるシリーズとは別に、平成2年度から7年度にかけては「県内の青銅製品の集成と分析」をテーマに未着手であった青銅製品の成分分析等の共同研究を実施し、平成8年度にはその成果として第17号を刊行した。第18号からは、現シリーズである「重要遺跡確認調査の成果と課題」というテーマのもとに、第4期として共同研究を開始した。

当センターでは、昭和56年度以来、千葉県教育委員会からの委託を受け、県内に所在する古代寺院跡や中近世城館跡、貝塚、古墳等重要なものを対象とする国庫補助事業「重要遺跡確認調査」を継続して実施してきた。調査成果については個別の報告書として年度ごとに刊行してきたが、調査結果の取りまとめと成果の集成作業については、これまでにセンターの事業として実施する機会がなかった。そこで、重要遺跡確認調査の成果を基礎として県内の同種の遺跡をも併せて検討することを目的に「重要遺跡確認調査の成果と課題」という共通テーマに基づいて、平成5年度から共同研究を開始することになった。平成9年度にその成果の第1冊目として「古代寺院跡確認調査事業」の成果に基づく「古代仏教遺跡の諸問題」を、平成10年度には第2冊目として「県内主要貝塚確認調査事業」の成果に基づく「県内主要貝塚の研究」として刊行した。本書は第3冊目として「県内主要城跡確認調査事業」の成果に基づく「房総の中近世城館跡の構造と特質」として刊行するものである。

千葉県教育委員会は、県内の中・近世遺跡の実態を把握するために、昭和45・46年度に分布調査を実施し、その成果を『千葉県中近世遺跡目録』1970・1971として刊行している。また、昭和55年度から保存策

はじめに

を講ずるための資料を得ることを目的に、重要度の高いものを選び、測量調査及び確認調査を開始し、平成9年度まで継続され、『千葉県中近世城跡研究調査報告書』を18冊刊行している。当センターは、昭和56年度から平成7年度まで15年にわたり調査を実施している。なお、昭和55年度は明治大学教授小室栄一を団長とする佐貫城跡・本佐倉城跡発掘調査団によって両城跡が調査され、佐貫城跡の最北端部において石垣の基底部分とピットを伴う土壇版築遺構を検出するなどの成果を得ている。平成8・9年度は千葉県立関宿城博物館によって実施されている。

調査は、航空測量を中心とし、補足的に地上測量によって城館跡の特徴を図化することによって、城館跡の詳細を記録することが可能となり、従前の城館跡研究で一般的であった歩測による縄張図や簡易測量に対して、格段に正確な図面が作成され、それに基づいた概念図も付けられた。また、各城跡100m²程度のトレンチによる確認調査であったが、大規模造成の様子把握、建物跡等の遺構の検出、中世遺物の出土等、多くの成果を得ることができた。大規模造成が窺える城館跡としては、東金市に所在する東金城跡においてII郭に設定したトレンチ調査によって、I郭の直下に検出した空堀が従来の認識を改めることとなった。建物跡等の遺構を検出した城館跡としては、富浦町に所在する岡本城跡において凝灰質砂岩の岩盤を掘り込んだ大規模な掘立柱建物跡をIb郭において検出し、天守閣に相当する高層建物の存在を推定することが可能となった。特徴的な遺物を出土した城館跡としては、市原市に所在する椎津城跡において、主郭部分に配置したトレンチから15世紀後半から16世紀後半に相当する舶載陶磁器、瀬戸・美濃窯系陶器をはじめ土師質土器を大量に検出した。また、室町時代前期の特徴をもった宝篋印塔を検出するなど、かつて出土した板碑との関係からも貴重な資料を得ることができたのは大きな成果であった。

千葉県教育委員会では中近世城跡研究調査を進める一方、平成2年度から7年度までの6か年計画で、中近世城館跡の詳細分布調査を実施し、『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告』I・IIを刊行し、分布状況をはじめ、主要な城館跡181か所について測量図とその詳細が記述され、併せて文献一覧が付されるなど遺跡の保護対策資料としてだけでなく中近世城館跡の研究に大きく寄与したと言える。

本書は、千葉県教育委員会が行ってきた中近世城館跡に関する一連の事業成果に基づいているが、その中心となっているのは15年間にわたり実施してきた中近世城跡研究調査に伴う成果であるとともに、当センターをはじめ、県内調査機関が実施した開発に伴う発掘調査成果を可能な限り取り上げるように心掛けた。中近世城館跡研究は古く江戸時代から始まったもので、縄張り研究が盛んに行われたが、近年は発掘調査例の増加に伴い、その調査成果に基づいた考古学的研究が主流となっている。千葉県は、特に北部の城館跡は台地上に立地するため、昭和40年代というかなり早い時期から開発の対象となっていたため、全国的にも中近世城館跡の調査数が突出して多く、貴重な研究や調査成果を提供し注目されている。一方、平成10年に本佐倉城跡が県内の城館跡として初めて国の史跡に指定され、中近世の城館跡に対する認識が深まった。本書はこのような状況を踏まえて、平成8年度から10年度までの3か年を費やした共同研究として実施してきた成果をまとめたもので、千葉県内外を問わず、今後の中近世城館跡研究にいささかなりとも役立つことがあれば幸いである。本書の執筆分担は井上哲朗、豊田秀治、鳴田浩司の三名である。文献目録は三名が共同で作成した。本書の編集作業に当たっては資料部資料課主任研究員渡邊智信が行った。

最後に、共同研究から本編をまとめるまでの間において、関係各位からは多大なる御指導、御協力をいただいた。ここに御芳名を録し、深く感謝の意を表するものである。

<協力機関>

豊島区教育委員会、つくば市教育委員会、小田原市教育委員会、松戸市教育委員会、四街道市教育委員会、千葉市教育委員会、富津市教育委員会、鴨川市教育委員会、守谷町教育委員会、酒々井町教育委員会、芝山町教育委員会、八戸市博物館、八王子市郷土資料館、茂原市郷土資料館、市浦村歴史民俗資料館、浪岡町中世の館、浪岡町史編纂室、豊島区遺跡調査会、財団法人茨城県教育財団、財団法人千葉県史料研究財団、財団法人千葉市文化財調査協会、財団法人印旛郡市文化財センター、財団法人香取郡市文化財センター、財団法人東総文化財センター、財団法人山武郡市文化財センター、財団法人君津郡市文化財センター、財団法人総南文化財センター、出光美術館

<協力者> (五十音順、敬称略)

石川 功、猪俣佳二、内野 正、小高春雄、小野正敏、金沢 陽、木内達彦、喜多圭介、北澤 滋、工藤清泰、榊原滋高、佐々木浩一、鈴木裕子、諏訪間順、高橋健一、滝川恒昭、谷口 栄、玉井輝男、津田芳男、戸井晴夫、土井義夫、遠山成一、外山信司、中井さやか、白田正子、橋口定志、藤澤良祐、星 龍象、馬淵和雄、水本和美、道上 文、道澤 明、築瀬裕一、山口剛志、山本賢一郎

<担当者>

平成8年度～平成10年度 鳴田浩司、井上哲朗、豊田秀治

<年度別調査城館跡>

昭和155年度 佐貫城跡(富津市)・本佐倉城跡(酒々井町)
昭和156年度 本納城跡(茂原市)・森山城跡(小見川町)
昭和157年度 大友城跡(東庄町)・坂田城跡(横芝町)
昭和158年度 稲村城跡(館山市)・臼井城跡(佐倉市)
昭和159年度 大崎城跡(佐原市)・万喜城跡(夷隅町)
昭和160年度 佐是城跡(市原市)・岡本城跡(富浦町)
昭和161年度 飯櫃城跡(芝山町)・籾木城跡(干潟町)
昭和162年度 飯野陣屋跡(富津市)・山崎城跡(佐原市)
昭和163年度 東金城跡(東金市)・城山城跡(千葉市)
平成元年度 椎津城跡(市原市)・大堀城跡(八日市場市)
平成2年度 中島城跡(銚子市)・鹿渡城跡(四街道市)
平成3年度 峰上城跡(富津市)
平成4年度 鶴ヶ城跡・亀ヶ城跡(岬町)
平成5年度 土気城跡(千葉市)・池和田城跡(市原市)
平成6年度 造海城跡(富津市)
平成7年度 真名城跡(茂原市)
平成8年度 助崎城跡(下総町)
平成9年度 増尾城跡(柏市)・佐津間城跡(鎌ヶ谷市)

序 章

井上哲朗

第1節 はじめに

中近世の城館跡研究は、文献史学・縄張り構造論・歴史地理学・考古学等の諸分野の総合的研究が必要であるが、本書では、主に考古学の立場からの視点を中心に房総の中近世城館跡の研究を試みたものである。

序章は、城館を中心とした千葉県の中近世史と城館跡研究史を概観したものである。

第1章は、縄張り構造を中心に地名・発掘成果等を数値化したデータベースを作成して、その統計処理を試みることによって、地域・時期、また、城及び城主の階級（クラス）の差がどのように現れるかを試みた。縄張り構造の比較による研究手法は、江戸時代の軍学から近代の軍事目的を経て現在に受け継がれるものであるが、城館を遺構「もの」として扱う性格から、広い意味では考古学の中に含まれる分野と考えられる。その資料となるのが、歩測によって描かれた縄張図（概念図）だけでなく、等高線によって表示する地形測量図であり、千葉県教育委員会によって実施されてきた県内中近世城館跡の測量調査もその一つである。従来、城郭研究者によって、城館の縄張り構造の地域論・発展論等が全国各地で行われてはいるが、漠然としたイメージであって、対象とする遺構の規模があまりに大きいために、その数量的計測には膨大な労力が必要であり、縄張り構造全体の様相の比較や織豊系城郭の虎口等の部分的な分類や編年が行われてきたにすぎなかったと言えよう。県内でもおおよその傾向は、城郭研究者の中では周知されてはいるが、対象とする遺構の規模が大きいために数量的処理はなされてこなかった。本稿でも県内全ての城館跡を対象としたものではなく、縄張図（概念図）や測量図が公表されているものに限った。なお、「縄張図」と「概念図」はほぼ同様の意味であるが、恣意的な想像図ではなく、構造を地表面地形から推測する意味で、本章では「概念図」を使用することにしたい。

地表面観察で作成される概念図や測量図は、実際の発掘調査の結果、埋没した空堀や斜面の新たな小曲輪が必ず検出される。よって、データベースも理想としては、全面発掘調査された資料を基にするべきであるが、現状としては、そうした例は少なく、発掘調査は城域の一部にすぎない。ただ、地表面観察の状況でも発掘調査後とそれほど変わらないものは、曲輪数・曲輪面積・全体的な曲輪や空堀の配置（縄張り構造）等であり、これらは、基礎データとして使えるものである。

千葉県においては、1990年代前半、千葉県教育委員会によって千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査が行われ、多くの概念図・測量図が掲載された報告書が1995年・1996年に刊行されたが、本章はまずそれを基本資料として、他の文献（発掘調査等報告書・論文・単行本等）の資料を加えたものであり、意義の一つとして詳細分布調査報告書に掲載されなかった“まとめ”の意味も持たせている。

第2章は、発掘調査の結果、検出された遺構について考察したもので、障子堀と地下式坑について、分析等を試みたものである。

障子堀は、従来、小田原城や山中城等、後北条氏関係の城郭で多く造られるものとされていたが、近年全国的に城館跡の発掘調査が進み、東北から近畿地方まで、多くの形態の障子堀（堀内障壁）が検出

され、後北条氏関係の遺構とは言えなくなってきた。千葉県内でも、15世紀前半から障子堀を有する城館跡の発掘調査成果が多く蓄積されてきた。第1節では、多くの形態を有する障子堀の分類と編年試案を提示したものである。なお、本稿の概略については、井上が既に発表したものであるが、ここに加筆修正したものを掲載することにした。^{②-376}

地下式坑は、中世城館のみならず、台地上の集落・墓地等の遺跡でも多く検出されるもので、多くは台地整形区画に伴う。城館跡の曲輪も台地整形の一種であり、築城以前に墓域であった城館も多い。その性格については、直接伴う遺物が少ないことから、多くの事例があるにもかかわらず諸説があり、まだ解決されていない。墓域に伴う例が多いことから墓の一種であるという説、江戸期の地下室に構造が類似することから倉庫だという説に大きく分かれる。総体的な所見からすれば、墓域検出のものは、直接遺体が埋葬される例が少ないことから、土坑墓あるいは火葬墓に葬られる前に、一時的に遺体を安置しておく施設ではないかと考えられる。第2節では、城館と集落・墓地で検出された地下式坑の差があるか分析を試み、城館内の曲輪の使われ方としての検討資料の一つを提示したものである。

第3章は、房総全体の、主に城館跡出土の遺物について、全体的様相を概観すると共に、東国内において研究が特に進んでいるとは言い難い千葉県の在地産土器（カワラケ・土器揃鉢・内耳土器など）の編年を試みたものである。カワラケは、本来、儀式で使われたものと考えられ、中世遺跡では全国的にも集落や墓地遺跡よりも城館跡で多く出土が見られる。従来、房総では、貿易陶磁器や瀬戸・美濃産、常滑産等の搬入品も多くこれらの編年に頼っていた部分がある。しかし、文献上、また発展した縄張り構造上、16世紀末まで確実に機能した筈の城館跡で当概期の瀬戸・美濃製品があまり出土しない例がある。瀬戸・美濃製品の供給量の減少或いは常駐しなくなった城館の機能の差であろうか、それを明らかにするためにも、在地産土器の編年作業はその基礎となるものであり、第1章の城館全体や第2章の遺構等の研究上、その時期確定のためにも今後必要な作業であると考えられる。

文献目録は、千葉城郭研究会による『千葉城郭研究』第1号（1989年）～5号（1998年）掲載の文献目録を基礎として修正・補完したものであり、基本的には平成11（1999）年度上半期内で入手できたものとした。^{②-178,241,283,327,373}

なお、本書の作成に当たっては、多くの方々に協力を得ており、その概略を記して深甚なる感謝の意を表したい。まず、千葉県内における中近世城館跡の発掘資料に関しては、佐倉城跡を佐倉市教育委員会の高橋健一氏・猪股圭二氏に、本佐倉城跡・長勝寺館跡・大堀館跡を酒々井町教育委員会の木内達彦氏に、篠本城跡を財団法人東総文化財センターの道澤明氏に、長生・市原地域の城館跡を千葉県立総南博物館の小高春男氏にそれぞれ御教示をいただいた。

次に県内の中近世遺跡発掘調査により出土した遺物に関しては、三輪ノ山遺跡出土資料を流山市教育委員会の北澤滋氏に、船橋市内の遺跡出土資料を船橋市郷土資料館の道上文氏に、印旛地域内の遺跡出土資料を財団法人印旛郡市文化財センターの喜多圭介氏に、千葉城跡・高品城跡・黒ハギ遺跡の出土資料を財団法人千葉市文化財調査協会の築瀬祐一氏に、長生地域内の遺跡出土資料を茂原市郷土資料館の津田芳男氏にそれぞれ御教示をいただいた。

次に千葉県周辺地域における中近世遺跡の発掘成果及び出土遺物を把握するため、茨城県内出土の近世土器を財団法人茨城県教育財団の白田正子氏、つくば市教育委員会の山本賢一氏に、土浦城跡出土のカワラケを土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場の石川功氏に、真壁城跡出土のカワラケを真壁町歴史民俗資

料館の星龍象氏に、葛西城跡出土資料を葛飾区郷土と天文の博物館の谷口栄氏に、尾張藩江戸上屋敷跡の発掘成果を東京都埋蔵文化財センターの内野正氏に、鎌倉市内の遺跡出土資料を鎌倉考古学研究所の馬淵和雄氏にそれぞれ御教示をいただいた。

次に土器編年の作成に関しては、貿易陶磁器を国立歴史民俗博物館の小野正敏氏、出光美術館の金沢陽氏に、瀬戸・美濃陶器を財団法人瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏に、近世陶磁器を豊島区教育委員会の橋口定志氏、豊島区遺跡調査会の鈴木裕子氏・中井さやか氏・水本和美氏にそれぞれ御教示をいただいた。

次に中近世城館跡に関する文献史料に関しては、印旛・千葉地域を財団法人千葉県史料研究財団の外山信司氏に、香取・海匝・山武地域を千葉県立佐倉東高等学校の遠山成一氏に、君津・安房地域を千葉県立船橋高等学校の滝川恒昭氏にそれぞれ御教示をいただいた。

最後に、県外の中近世遺跡及び城館跡の資料収集に関しては、根城跡を八戸市博物館の佐々木浩一氏に、浪岡城跡を浪岡町史編纂室の工藤清泰氏に、十三湊遺跡群を市浦村教育委員会の榊原滋高氏に、八王子城跡を八王子教育委員会の戸井晴夫氏に、小田原城跡を小田原市教育委員会の諏訪間順氏・山口剛志氏に、守谷城跡を守谷市教育委員会の玉井輝男氏にそれぞれ御教示をいただいた。

第2節 城館をめぐる房総の中近世史

本節では、従来の研究から導き出されている房総の中近世城館の変遷を歴史的背景を踏まえて概観するものである。その多くは、千葉城郭研究会編『千葉城郭研究』第1号(1989年)所収の「城郭からみた千葉県の中世史概説」を参考にしながら、その後の研究成果を追加したものである。^{②-178}

なお、千葉県内の中近世城館跡全体の分布傾向は第1図を、時代の流れは以下の本文と照らして第1表を参照されたい。

1. 平安時代後期

(1) 10世紀 この時期は、武士団の形成期にあたる。天慶2年(939)の平将門の乱を記した『将門記』によると、地方軍事貴族の拠点は「宅」・「営所」と呼ばれる居館であった。営所の周囲に「従類」の住む「小宅」が集まっていた。

(2) 11世紀 長元元年(1027)の平忠常の乱では、忠常の拠点は、伝承では大友城(東庄町)や大椎城(千葉市)とされてきたが根拠はない。大椎城の発達した縄張構造(第87図)は明らかに16世紀代であり、11世紀に忠常が拠点としたとすれば、居館は山の下にあった可能性がある。なお、『今昔物語集』からは、忠常が香取浦に面した居館に住して水運を掌握していたことがわかる。

2. 中世前期

(1) 12世紀 1180年に源頼朝が石橋山合戦に敗れ、安房国に上陸するが、『吾妻鏡』には、安房の在地領主である安西景盛の館、頼朝の滞在した「鷲沼御旅館」(習志野市)が、『源平闘諍録』には「千葉館」、千田判官藤原親政の「匝瑳之北条内山館」・「千田庄ノ次浦館」が登場する。

(2) 13世紀 千葉秀胤は、宝治元年(1247年)の宝治合戦で三浦氏側に属して北条氏に討たれたが、『吾妻鏡』によると、秀胤は本拠地の大柳館(長生郡睦沢町か)の「郭外」に炭や薪を積み上げて放火して自害した。これにより、大柳館に「郭」と「外」があり、「門」や「馬場」がり、その内部に「数十字の舎屋」が存在したことがわかる。なお、発掘調査では、四街道市池ノ尻館跡(第21図)・長南町岩川館跡(図版10-2)・鋸南町下ノ坊館跡(第153図)等の館跡はこの頃から機能していたことが判明している。

(3) 14世紀 南北朝の動乱期で、建武2年(1335)、相馬親胤と千田胤貞は「千葉楯」を攻撃し、この頃、千田庄(多古町周辺)では胤貞方と千葉介方が戦闘を行ない、「土橋城」・「大島城」・「並木城」が登場する(『金沢文庫文書』)。

なお、『延慶本平家物語』には、長寛元年(1163)三浦義明の嫡男の梶本義宗が「安房国長狭城責」を行っており、同書が著された14世紀初頭には既に「城」という言葉が使用されている。

3. 中世後期1(戦国期前半)

(1) 15世紀前半～中葉 室町幕府の関東行政機関である鎌倉府の長、鎌倉公方とその執事関東管領との関東をめぐる覇権争いの結果、応永23年(1416)に勃発した上杉禅秀の乱の後、禅秀派の残党による上総本一揆(応永25年(1418))が起きる。その一揆の拠点として「平之城」(市原市平蔵城か)・「坂水城」(大原町か)が登場する。



第1図 千葉県内中近世城館跡分布 (1/60万)

第1表 千葉県内中近世城館関係年表

世紀	元号	西暦	国内の主な事件等	旧下総国	旧上総国	旧安房国
10	天慶2	939	この頃、藤原純友の乱	平将門の乱。拠点は「宅」・「営所」(「水守の営所」・「石井の営所」・「石井の宿」)(『将門記』)		
	長元元	1027		平忠常の乱。伝承ではその拠点は太友城(東庄町)・大椎城(千葉市)、後忠常子孫が両総各地に武士団形成。有力者上総氏。		
11	永承6	1051	前九年の役			
	康平2	1059	後三年の役			
	保元元	1156	保元の乱			
	平治元	1159	平治の乱			
12	長寛元	1163				三浦義明嫡男堀本義宗が「安房国長狭城賣」を行う。(『延慶本平家物語』14世紀初頭)
	治承4	1180	源頼朝挙兵	「千葉館」(千葉市)・「鷲沼御旅館」(習志野市)・「匝瑳之北条内山館」・「千田庄ノ次浦館」(多古町)。下総国守護千葉常胤。	上総国守護上総介広常	源頼朝安房上陸。「安西景益の館」。この頃安房の在地領主は丸・安東・安西・神余氏等。以後、鎌倉幕府御家人。
	寿永2	1183			広常鎌倉にて誅殺。所領は和田義盛・千葉常秀に。	
	建久3	1192	源頼朝、鎌倉幕府開府			
13	建保元	1213	和田義盛の乱			
	承久3	1221	承久の乱			
	宝治元	1247	宝治合戦。三浦康村、北条時頼に討たれる。	千葉時常所領増生荘は足利義氏に。後、北条実時に。	三浦氏親戚千葉秀胤(上総千葉氏)・千葉時常、東・大須賀氏らに追われ、大柳館(睦沢町か)の郭外に火を放ち自害。「郭」・「門」・「馬場」・「数十字の舎屋」等存在。(『吾妻鏡』)	
	文永11	1274	文永の役	千葉介頼胤、九州で戦死。子胤貞継ぎ千田氏と称し、下総守護は貞胤に継承。		
	弘安4	1281	弘安の役			
14	元弘3	1333	鎌倉幕府滅亡			
	建武元	1334	建武新政、鎌倉府成立			
	建武2	1335		陸奥国小高城主相馬親胤・千田胤貞、「千葉城(楯)」攻撃のため、下総に侵攻。この頃、千田庄(多古町周辺)で胤貞方と千葉介方が戦う(「土橋城」・「大島城」・「並木城」登場。(『金沢文庫文書』))。		
	暦応元	1338	足利尊氏室町幕府開府			
15	明德3	1392	南北朝合一			
	応永23	1416	上杉禪秀の乱。関東管領上杉氏憲(禪秀)、鎌倉公方足利持氏に反抗。		この頃、上総国守護犬懸上杉氏。	
	応永25	1418			上総本一揆。一揆の本拠は「平之城」(市原市平蔵城か)・「坂木城」(大原町か)。	
	永享10~11	1438~39	永享の乱。室町幕府足利持氏を討つ。			
	永享12~13	1440~41		結城合戦。結城氏朝、持氏遺児を擁し挙兵。		
	嘉吉元	1441	嘉吉の乱			
	享徳3~5	1454~56	享徳の大乱。足利成氏古河城入部、古河公方成立。	成氏方原胤房、上杉方千葉介胤直を千葉城に襲い、胤直ら円城寺氏を頼って千田庄に逃亡。原氏、馬加康胤を立て多古・島岡城を攻撃し、胤直滅ぼす。他、東常縁馬加城攻撃。常縁武将浜春利東金城に拠る。胤直遺子市川城籠城。原信濃守拠点松戸城郭。	この頃、武田氏上総入部。武田信長、長南城(長南町)・真里谷城(木更津市)築城。	この頃、里見氏安房入部。
15	長祿元	1457	幕府、足利政知を関東に下す(堀越公方)。古河公方対堀越公方・関東管領上杉氏			
	応仁元~文明9	1467~1477	応仁・文明の乱			

世紀	元号	西暦	国内の主な事件等	旧下総国	旧上総国	旧安房国
	文明3	1471		足利成氏、佐倉の千葉孝胤頼る。(この頃までに千葉宗家、本佐倉城を拠点とする。)		
	文明4	1472		千葉・武田・里見氏、古河城攻撃。足利成氏を古河城に戻す。		
	文明10	1478		境根原の戦い(柏市)。太田道灌、千葉孝胤・原氏軍破る。		
	文明11	1479		太田資忠・千葉自胤、臼井城攻略。武田氏の長南城・真里谷城、海上氏の飯沼城も攻撃。		
	文明14	1482	古河公方と堀越公方(政氏対高基・義明)。	幕府方一時和解するが、上杉家内争乱(山内対扇谷)・足利家内争乱		
	明応4	1495	北条早雲・氏綱、小田原城入部。			
	永正9	1509		連歌師宗長、原胤隆の「小弓の館」訪問、千葉の妙見祭り等楽しむ。		
	永正14	1517		足利義明、原氏の小弓城(千葉市)攻撃し落城。弥富(佐倉市)も攻撃。小弓公方の成立。	足利義明、武田信保を助け、三上城(茂原市)攻撃。	
	永正16	1519			足利高基、義明下真里谷武田氏の椎津城(市原市)攻撃。	
	大永6	1526				里見夷堯、鎌倉攻撃。
	天文2 ~3	1533 ~34				里見義豊、正木大膳大夫・叔父夷堯を討つが、夷堯子息義堯および後北条・正木氏に反撃される。(天文の内乱)(稲村城(館山市)・滝田城(三芳村)・百首城(富津市))
	天文6	1537				真里谷真隆、峰上城・百首城(富津市)・「真里谷新地之城」(木更津市)で北条氏に通じ、足利義明・里見義堯、真隆攻撃。
	天文7	1538	古河公方足利晴氏、北条氏綱に義明攻撃依頼。	第一次国府台合戦(市川市)。(足利義明・里見義堯対北条氏綱・氏康、義明戦死。)		
	天文12	1543	鉄砲伝来		武田信茂の笹子城(木更津市)、北条氏と里見氏の攻防により落城	
	天文13	1544			里見・武田軍、中尾城(木更津市)攻略。正木時茂、小田喜城(大多喜町)攻略。	
	天文21	1552	足利晴氏、義氏に古河公方譲る。			
	天文22	1553			上総・安房に北条氏に内応した内乱。妙本寺住職日我、金谷城(富津市)に避難。同城攻撃される。	
	弘治3	1557		千葉胤富、千葉介を継ぎ、森山城(小見川町)から本佐倉城(酒々井町)に移る。		
	永禄元	1558		北条氏康、足利義氏家臣梁田晴助と盟約し、義氏、関宿城(関宿町)に移る。		
	永禄3	1560	上杉謙信関東へ南下。		北条氏康、里見義堯の久留里城の向かいに「新地」を取り立てる。	
	永禄4	1561	上杉謙信小田原城を囲む(房総諸氏も参加)。鎌倉で関東管領職受ける。	古河公方義氏、関宿城脱出し高城氏の小金城(松戸市)、さらに江戸城へ。足利藤氏古河城入部。		
	永禄5	1562			足利藤氏、古河城脱出し里見氏を頼る。	
	永禄6	1563	武田・北条軍北関東攻撃。			
	永禄7	1564	上杉謙信関東侵入。里見義弘と共に北条氏康攻撃を謀る。	第二次国府台合戦(市川市)。(里見義弘方対北条氏康)、里見方敗退。	正木時忠、北条氏と通じ、一宮城(一宮町)攻撃、後海上・香取郡へ侵攻。小見川城(小見川町)落城。	
16	永禄8	1565			正木時茂の小田喜城・土気酒井氏の土気城(千葉市)、北条氏政方(原・臼井・東金酒井氏)に攻撃受ける。「宿城」・「善生寺口」・「金谷口」で攻防戦。	
	永禄9	1566		上杉謙信、下総侵攻。原胤貞の臼井城包囲。「実城堀一重」まで攻められ		
	永禄10	1567		里見氏、松戸市・市川市・臼井まで侵攻。		三船山(君津市)の合戦。里見義弘方対北条氏。里見方勝利。
	永禄12	1569 ~71	越相一和(上杉・北条同盟)			
	元龜2	1571 ~82	甲相一和(武田・北条同盟)			

世紀	元号	西暦	国内の主な事件等	旧下総国	旧上総国	旧安房国
16	天正元	1573	室町幕府滅亡	北条氏政、梁田氏の関宿城攻略。 「作倉領」に北条氏の禁制発布。 北条方の諸氏、小田原城籠城戦へ。下総・上総の諸城、秀吉軍浅野・本多らにより落城。両総に家康家臣団配置される。一万石以上の家臣の居城は以下の通り。 矢作城（鳥居）・臼井城（酒井）・本 宿城（松平）・芦戸城（木曾）	土気城酒井胤治、北条方に属す。 北条氏政、上総侵入。土気・東金・両酒井氏・土岐氏（万喜城）ら北条方に属す。この頃、有木城（市原市）、北条氏の上総攻略の「惣番手城」として機能。 里見義弘死。後家臣団の内紛（義頼方対梅王丸方）。義頼は岡本城（富浦町）、梅王丸方は佐貫城・百首城（富津市）・久留里城・千本城（君津市）等。 小滝（小田喜）城主正木憲時、里見義頼に反し北条方に属し、義頼正木氏を滅ぼす。後、義頼次男を正木大膳として正木氏を復活させる。	里見義頼、北条氏と結ぶ。
	天正2	1574				
	天正3	1575				
	天正4	1576	織田信長安土城築城			
	天正5	1577				
	天正6 ～8	1578 ～80				
	天正9	1581				
	天正10	1582	本能寺の変			
	天正14 ～15	1583 ～84	豊臣秀吉、関東に「惣無事令」発布。			
	天正18	1590	秀吉軍小田原城攻略し北条氏滅亡。徳川家康江戸入部。			
天正19	1591		下総・上総国に検地。			
文禄元	1592	文禄の役。秀吉軍朝鮮出兵。この頃、肥前（長崎県）に名護屋城、朝鮮に倭城築城。				
慶長2	1597	慶長の役。秀吉軍朝鮮再出兵。				
慶長5	1600	関ヶ原の戦い。				
17	慶長8	1603	家康、江戸幕府開府。	臼井城（臼井藩酒井家次）廃城。 岩富城（岩富藩北条氏重）廃城。 大坂冬の陣・夏の陣。豊臣氏滅亡。一国一城令・武家諸法度・禁中並公家諸法度等制定。 佐倉藩土井利勝、佐倉城築城。 生実藩、森川陣屋築館。 飯野藩、飯野陣屋構える。	里見氏、豊臣方に属す。里見義頼、安房一国のみ与えられる。館山城築城。	
	慶長9	1604				
	慶長18	1613				
	慶長19	1614				
	元和元	1615				
	元和3	1617				
	寛永2	1625				
	寛永14	1637	島原の乱			
	寛永16	1639	鎖国開始			
	慶安元	1648				
18	享保年間	1716 ～35	享保の改革他			
	安永7	1778	ロシア船蝦夷地来訪			
	天明元	1781				館山藩再立藩（稲葉氏）。
19	文政8	1825	外国船打払令		一宮藩成立。 請西藩成立。貝淵陣屋築く。 松尾藩、松尾城築城開始、同年各 城廃城。	各城廃城。
	文政9	1826				
	嘉永3	1850				
	安政元	1854	日米和親条約			
	安政5	1858	日米修好通商条約			
	慶応3	1867	大政奉還			
	明治元	1868	明治維新			
	明治2	1869	版籍奉還			
明治4	1871	廃藩置県				

その後も鎌倉府を古河に移した古河公方と関東管領との争いが続き、享徳4年(1454)足利成氏方の原胤房は上杉方の千葉介胤直を千葉城に襲い、胤直らは円城寺氏を頼って千田庄に逃げるが、原胤房は馬加康胤と共に多古・島両城を攻撃している。また、この大乱では、東常縁が攻撃した馬加城(千葉市)、常縁の武将浜春利の拠った東金城(東金市)、胤直の弟胤賢の遺子実胤・自胤(後の武蔵千葉氏)の籠もった市川城(市川市)、原信濃守の「松戸城郭」等が登場する(享徳の大乱)。

(2) 15世紀後半 享徳の大乱の後、文明3年(1471)には、足利成氏が長尾景春に追われ佐倉の千葉孝胤を頼って来ており、この頃までには千葉宗家が本佐倉城(酒々井町)に本拠を移していたことがわかる。文明10年(1478)には、上杉氏の家宰太田道灌は、境根原(松戸市)の戦いで千葉孝胤・原氏の連合軍を破り、半年に及ぶ攻防戦で臼井城を落城させ、攻撃軍は長南城(長南町)・真里谷城(木更津市)に拠る武田氏、飯沼城(銚子市)の海上氏も攻撃している。

(3) 15世紀末～16世紀前葉 この頃、下総中央部では、臼井城を本拠とし鹿島川の西岸地域(臼井庄・現佐倉市西部～四街道市)に勢力を持っていた臼井氏一族が千葉宗家に取り込まれ、臼井城は原氏に奪取され、原氏は生実城と臼井城を本拠とする。永正9年(1509)、連歌師宗長は原氏の「小弓の館」を訪れ、千葉の妙見祭り等を楽しんでいる(『東路の津登』)。

享徳の大乱を契機として房総に入部したと考えられる武田氏と里見氏は、この頃史料上に登場してくる。

武田氏によって古河公方に対向して擁立された足利義明は、永正14年(1517)三上城(茂原市)、小弓城(千葉市)を攻めて原氏を追い出し小弓公方として小弓城に入部した。対する足利高基は、永正16年(1518)義明下の真里谷武田氏の椎津城(市原市)を攻撃している。

里見氏は、義通の代に安房国を掌握したと見られ、子義豊は16世紀初め頃に対岸を渡海して鎌倉を攻撃した。天文2年(1533)、重臣正木氏をめぐる一族内の対立が起こる(天文の内乱)。この内乱の舞台とした城館は、稲村城(館山市)、滝田城(三芳村)、百首城(富津市)が推測されている。

天文4年(1535)、古河公方足利高基死去後、それを継承した晴氏と義明の抗争へ移るが、晴氏は後北条氏を頼り房総へも進出してくる。また、武田氏内部も内乱が起こっており、里見氏がこれに介入した結果、後北条氏と里見氏が衝突し、椎津城(市原市)・「百首之要害」(造海城)(富津市)・「真里谷新地之城」(木更津市)で攻防戦が行われている。この里見氏の反撃によって、原氏は岩富城や小弓城で討たれている。天文7年(1538)、義晴方の後北条氏と義明方の里見氏が国府台で戦い(第1次国府台合戦)、義明は討ち死にし、里見氏は敗走する。以降、後北条氏の房総への影響力が強まる。

その結果、北条氏との関係を深めた原氏は小弓城に復帰し北に生実城を築き、高城氏は小金城(松戸市)に拠り、後北条氏の房総進出の拠点となる。千葉宗家では天文15年(1546)に北条氏康の女婿利胤が継いだ。また、真里谷武田氏は後北条氏寄りの信隆が宗主となるが、里見氏は国府台合戦で敗走しながらも逆に義明の死により西上総へ進出する。真里谷武田氏一族内の乱によって、笹子城・中尾城(木更津市)が里見氏の介入で落城し、里見義堯は佐貫城(富津市)に子義弘を置いた。なお、東上総では、里見氏重臣でもありながら半ば独立的な正木氏が勝浦城(勝浦市)・小田喜城(大多喜町)を本拠とし、土気・東金には酒井氏が領国を形成していた。

4. 中世後期2(戦国期後半)(第2表、第2図)

(1) 16世紀後半 第1次国府台合戦以降、後北条氏と里見氏の攻防が繰り返されるが、この頃、里見氏方

第2表 戦国末期房総の勢力分布

城 名	関東八州諸城覚書1	関東八州諸城覚書2	北条氏人数覚書	騎馬数	城主の系列	豊臣期の在城者
結木の城 (下総・結城城)	結木晴友 (結城晴朝)	結城晴友 (結城晴朝)			結城氏	結城秀康10.1
山川の城 (同・山川城)		山川右衛門尉 (山川晴重)				山川晴重・朝貞
(同・古河城)					北条氏 (古河公方)	小笠原秀政3.0
水見城 (同・水海城)	北条陸奥守 (氏照)	北条陸奥守 (氏照)	北条陸奥守 (氏照)	4500騎 の内		松平康元2.0
関宿 (同・関宿城)	同	同				
栗橋 (同・栗橋城)	同	同				
(同・守谷城)			惣馬 (相馬) 小次郎	100騎		菅沼定政1.0
さくら (同・本佐倉城)	千葉助 (千葉重胤)	千葉助 (千葉重胤)	千葉介 (重胤)	3000騎	(千葉氏)	三浦義次1.0.の ち武田信吉4.0
白井城 (同・白井城)	原大炊助	原大炊助	原大炊助	2500騎		酒井家次3.0
こかね井城 (同・小金城)	高木 (高城胤則)	高木 (高城胤則)	高木 (高城胤則)	700騎		武田信吉3.0
ふ川の城 (同・布川城)	十嶋 (豊島三河守)	外嶋 (豊島三河守)	十嶋 (豊島三河守)	150騎		
わう大ノ城 (同・大台城)	板野刑部大夫	坂野形 (刑) 部大夫	板野形部大夫	150騎		
かふらき城 (同・鎭木城)	蕪木駿河守	蕪木駿河守	蕪木駿河守	300騎		
矢はきの城 (同・矢作城)	小窪 (国分) 五郎	小窪 (国分) 五郎	小窪 (国分) 五郎	500騎		鳥居元忠4.0
(同・小見川城)						松平家忠1.0
(同・多古城)						保科正光1.0
(同・岩富城)						北条氏勝1.0
(同・山崎城)						岡部長盛1.2
(同・蘆戸城)						木曾義昌1.0
とうかねの城 (上総・東金城)	坂井右衛門尉 (酒井政辰)	坂井左衛門尉居城 (酒井政辰)	坂井右衛門尉 (酒井政辰)	150騎	(酒井氏)	
とけの城 (同・土気城)	同左衛門佐 (酒井康治)	坂井伯耆 (守) 居城 (酒井康治)	坂井左衛門尉 (酒井康治)	300騎		石川康通2.0
(同・鳴渡城)						
長南之城 (同・長南城)	長南刑部大夫 (武田豊信)	竹田兵部太輔居城 (武田豊信)		1500騎	(武田氏)	
池和田之城 (同・池和田)	同	竹田兵部抱				
かつみの城 (同・勝見城)	同	同				
まん木ノ城 (同・万木城)	土岐少弼	とき (土岐) 大弼居 城	とき (土岐) 少弼	1000騎	(土岐氏)	本多忠勝10.0, のち小田喜城
へびうかの城 (同・不明)	同	とき大弼抱	同			
鶴賀ノ城 (同・鶴賀城)	同	とき弾正大弼抱	同			
小田喜 (同・大多喜城)	さつみの義晴 (里見義康)	真崎大膳城主也 真崎石見守当時代也		3000騎	里見氏	内藤家長2.0
さぬき城 (同・佐貫城)	同	加藤大郎左衛門				
岡本之城 (安房・岡本城)	同	左馬頭居城里見義安 (里見義康)				里見義康9.2
(安房・館山城)						
かち山之城 (同・勝山城)	同	正木右衛門大夫 安芸守居城				
つくろふみの城 (上総・造海城)	同	真崎淡路守家城				
小さいの城 (同・小糸城)	同	里見弾正少弼居城				
くるりの城 (同・久留里城)	同	山本越前守				松平忠政3.0
かつらの城 (同・勝浦城)	同	正木左近大夫居城 (正木頼忠)				
おつ木の城 (同・興津城)	同					
よしょうの城 (同・吉字城)		正木左近大夫抱				
一宮ノ城 (同・一宮城)		鶴見甲斐守居城				
かなや (同・金谷城)		真崎淡路守抱				

1) 本表は、「毛利家文書」所収の3点の文書を典拠として作成した。

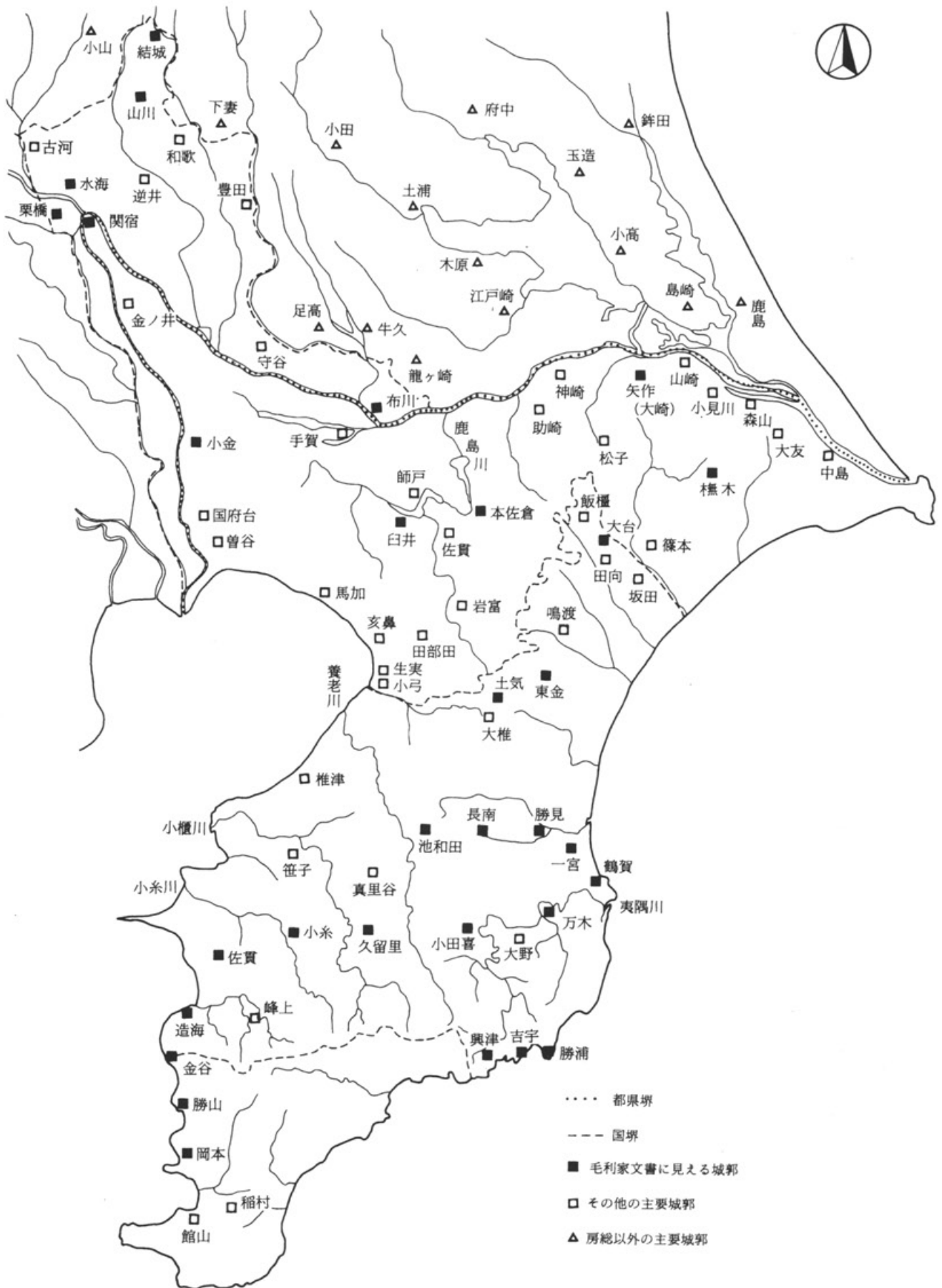
2) 本表では、茨城県域に属する旧下総国の城郭についても扱っている。

3) 天正18～慶長5年に在城者がいながら、上記の文書に記載の見えない城郭については、括弧内にその城郭名と国名のみを記した。

4) 騎馬数は、関東八州諸城覚書2と北条氏人数覚書の両者に見える場合、妥当性の高いものを記した。ただし、この数字は戦国末期に豊臣方からそのように評価されていたことを示すものである。

5) 「豊臣期の在城者」の欄に見える人名のつぎの数字は石高 (万単位) を示す。

(市村高男「房総における中世城館跡の地域的時代的分布とその特質」
『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書II』1995年より)



第2図 房総の戦国末期主要城館分布

(市村高男「房総における中近世城館跡の地域的時代的分布とその特質」より)

の峰上城（富津市）に詰めていた吉原玄藩助や「尾崎曲輪廿二人衆」らの小土豪層に対し、後北条氏の懐柔政策が行われている。天文22年（1553）、この渦中で妙本寺住僧日我は金谷城（富津市）に避難するが、兵火に掛かる。永禄3年（1560）、北条氏康は里見義堯の久留里城（君津市）の向かいに「新地」を取り立て攻防戦が行われたが、里見氏の要請により上杉謙信が関東に出兵したため、後北条氏は撤退する。翌年、謙信は後北条氏の本城小田原城を囲み、鎌倉で関東管領職を譲り受ける。永禄6年（1563）、甲斐の武田・後北条軍は北関東を攻撃し、上杉氏は里見氏と挟み撃ちを試み、翌年、第2次国府台合戦が起こる。この結果、里見氏は再び敗れ、後北条方は上総へも進出する。また、正木時忠も後北条氏に通じ、一宮城（一宮町）を攻撃し、海上・香取地域にも侵攻する。翌年には正木時茂の小田喜城・土気酒井氏の土気城（千葉市）が後北条方に攻撃されるが、この攻撃軍は原氏や臼井氏らであった。土気城の攻防戦では「宿城」・「善生寺口」・「金谷口」が舞台となった（第98図）。一方、永禄9年（1566）、上杉謙信は後北条方となった下総地域に侵攻し、原胤貞の臼井城を包囲して「実城堀一重」まで攻めるが撤退する。翌年には、三船山（君津市）において後北条氏と里見氏が合戦を行い里見氏が勝利し、しばらくは里見氏の上総経営は安定するようである。

この時期は、本丸としての「実城」、居住区に推定される「根小屋」、外郭としての「宿城」、また、臨時的な「陣城」等が史料上に登場する。

(2) 16世紀末 この時期は、後北条氏の関東進出が著しく、天正2年（1574）には築田氏の関宿城（関宿町）が落城し、土気酒井氏や万喜城（夷隅町）の土岐氏も後北条方に属す。翌年（1575）には「作倉領」に後北条氏の直接の禁制が出され、有木城（市原市）は後北条氏の「惣番手城」として上総攻略の拠点となっていた。

下総では、本佐倉城の普請も後北条氏に近い井田氏や後北条氏家臣によって行われ、在番勢力が置かれ、佐倉の船舶の課役や森山城の樹木の伐採も後北条氏の直接命令によって行われるようになった。小金城（松戸市）の高城氏と大台城（芝山町）・坂田城（横芝町）の井田氏は後北条氏の直接軍事指揮下に入り、牛久城（茨城県牛久市）や川越城（埼玉県川越市）の在番を務めている。北条氏政の5男直重の下に「佐倉御旗本」が組織され、千葉氏の分国「佐倉領」は後北条氏の支城領化の傾向が見られた。なお、原氏は千葉氏配下から半独立的となり、臼井・生実城を中心に印西・手賀・岩富・小西等に拠点を持ち、二千騎の家臣団を直接掌握するようになった。

上総・安房では、後北条氏勢力の房総浸透により、里見氏も天正5年（1577）には後北条氏と同盟を結ぶ形となり、家臣団の分裂も起こる。天正6年（1578）里見義弘の死による相続争いで、子義頼に対抗した義兄弟梅王丸支持勢力は、佐貫城・百首城（富津市）、久留里城・千本城（君津市）等である。また、その直後、正木憲時が里見氏に対して反乱を起こす。この大膳亮系正木氏は小田喜城（大多喜町）・興津城（勝浦市）を中心に浜萩城（天津小湊町）・金山城（鴨川市）・吉宇城（勝浦市）等を本拠にしていたが、里見義頼は小田喜城に正木氏を滅ぼす。しかし、その後、二男に正木大膳の名跡を継承し復活させるが、同時に里見氏一門として家臣団の再編が行われた。この時期は里見氏と後北条氏は直接抗争することも殆ど無かったようである。

一方、この時期、畿内・西国では豊臣秀吉による全国統一が推進されつつあり、天正14・15年（1586・87）には東国を対象とした「惣無事令」が出され、関東に広く勢力を拡大していた後北条氏は、危機感を強め、配下の諸城の大改造を行わせたことが考えられる。こうした状況下、里見氏は義頼の子、義康以降、

秀吉方に付くことになる。

天正18年(1590)、豊臣秀吉軍が後北条氏領国に侵攻し小田原城は落城し、後北条方の房総の諸軍本体は小田原城に籠城したため、房総諸城も別働隊によって開城となる。豊臣方が把握していた房総の諸城と兵力は『毛利家文書』の「関東八州諸城之覚書」や「北条氏人数覚書」に記されている(第2表・第2図)。ここで、列挙すると、佐倉(千葉氏)3000騎、臼井(原氏)2000騎、小金(高城氏)700騎、府川(豊島氏)150騎、守谷(相馬氏)100騎、鎭木(鎭木氏)300騎、矢作(国分氏)150騎、東金(酒井氏)150騎、土気(酒井氏)300騎、長南・池和田・勝見(長南武田氏)1500騎、万喜・へびうか(位置不明)・鶴が城(土岐氏)1500騎が後北条氏方であり、一方、里見方は、岡本(里見義康)、金谷・勝山・造海・かつら(勝浦)・よしう(吉宇)(正木氏)、一宮(鶴見氏)、久留里(山本氏)、小糸(里見氏)、佐貫(加藤氏)で3000騎である。しかし、これらは、豊臣方に把握されていたもので主要城郭であり、各城にはさらに支城群が存在したことが考えられる。

16世紀後半から末期つまり、戦国時代末期の房総の城郭について概観すると、現在までに次の様な地域的差異が考えられている。

(上総北部から下総全域の下総台地地帯)

千葉氏の分国「佐倉領」の領域支配の中心として機能し、最後には後北条氏領国の有力支城となった本佐倉城(第40図)、広範囲な領域支配の拠点となった原氏の臼井城(第41図)があり、これらは城下集落を取り込む「惣構」を有し、周囲には支城群を配置している。また、高城氏の小金城(第19図)や土気酒井氏の土気城(第98図)、原氏の生実城(第50図)も広域支配の拠点となり、本佐倉城や臼井城に準じた「外郭部」を有していた。なお、縄張り構造的には「枅形」・「折り歪み」・「馬出し」等の近世城郭につながる様な発展した形態もこの地域で見られる。

(上総中央部から南部の丘陵地帯)

丘陵地形はそれ自体要害であることや広い面の造成が困難であること等から、台地上の城とは縄張り構造が全く異なる。しかし、丘陵の城郭でも長南武田氏の長南城(第114図)や土岐氏の万喜城(第126図)の様に尾根部に延々と手を加え広大な城域を形成するものや、長南武田氏の支城である池和田城(第131図)・勝見城(第110図)、土岐氏の鶴か城(第119図)・大野城(第117図)の様に広大な平坦面を城域に取り込み外郭部とする様な形態もある。

(上総南部から安房の丘陵地帯)

当地域は、里見氏領国内であるが、同氏の居城は以北の有力者の本城が領域内で突出した規模であったのに比較して差異が少ない傾向があり、機能的に分散されていた傾向が窺える。これは、里見氏が居城を何度も変遷させたこと、正木氏の独立性の強さに代表される非中央集権的構造であったこと等の背景が考えられる。また、金谷城・造海城(第147図)・勝山城等里見水軍の拠点としての「海賊城」の視点も考えられる。

5. 近世～近代(第3図)

(1) 16世紀末～17世紀前葉 天正18年の小田原征伐後、徳川家康が関東に入部し房総には家康家臣団が配置された(第3図)。一万石以上の上級家臣の居城は中世城郭を利用したもので次の通りである。

大多喜城(本多氏)、久留里城(大須賀氏)、佐貫城(内藤氏)、鳴戸城(石川氏)、矢作城(鳥居氏)、臼



第3図 近世初期(天正18年後半)の房総の諸士
(『角川地名辞典』所収の図を基に作成)



第4図 千葉県地形分類図
 (『角川日本地名大辞典12 千葉県』より)

井城（酒井氏）、本佐倉城（三浦氏）、岩富城（北条氏）、関宿城（松平氏）、芦戸城（木曾氏）。

また、里見氏は上総を没収され、安房一国のみの領国となり、館山城を築城するが、慶長19年（1614）には伯耆国（鳥取県）へ転封され、同城は破却される。

(2) 17世紀前葉～19世紀後半 近世を通じて機能した城は、大多喜城（第127図）・久留里城（第151図）・佐倉城（第43図）・関宿城である。しかし、房総には城を有しない小藩も多く存在し、陣屋が数多く設置された。陣屋の中には生実藩の森川陣屋の様に北生実城跡内に造られたものもあった（第50図）が、発掘調査によると、中世の大規模な空堀が埋められて浅い堀が使われたという事実があり、身分による城郭形態の差が統制されていたと見られる。

異質な城館として、徳川将軍の鷹狩りのための休息所として、御成街道沿いに造られた船橋御殿・御茶屋御殿・東金御殿がある。現存する御茶屋御殿跡（第51図）は単郭方形館ながら虎口に内枳形を用いるなど、中世城館の集大成ともいえる形態である。

(3) 19世紀後半～20世紀前半 幕末には、外国船に対する防御のために沿岸部に砲台・台場（造海城・富津台場など）などが築かれ、その後の第二次世界大戦のアメリカ軍上陸に備えた要塞としても機能した。また、江戸幕府滅亡により徳川氏が駿府に移され、代わりに駿河・遠江の諸藩が房総に移封され、例えば松尾藩は明治に入って稜堡式の洋風城郭の築城に着手したが、廃藩置県により廃城となった。

第3節 研究史概要

本節では、千葉県を中心に城館研究の概要を時代・時期を追いながら、方法論別に概観したい。

1. 江戸時代

文献研究では、戦国時代の争乱が終結した後、「家」(氏族)の系譜・歴史を明らかにするためもあるが、「読み物」として多くの軍記物が作成される。関東全体に関わるものでは、『関八州古戦録』・『東国戦記』等が著名であるが、房総では特に『房総里見軍記』等里見氏関係や『土気城双鹿記』・『土気東金両酒井記』等土気・東金酒井氏関係が多い。これらは、戦国期に家臣として従した者が江戸時代に入って記録したものもあるが、その性格上、概ね書き手(家)の立場上有利な推測が史実の様に書かれており、年代も一次史料と矛盾するものが多い。また、江戸時代は「国学」が盛んとなるが、房総における中世史については、軍記物の域を出ていないと言ってよいであろう。

城そのものに対する研究も盛んとなる。江戸時代には戦乱が収まったために城郭の性格が変容した。その変容は既に戦国期後半には現れていたが、臨時的・実戦的な城から領地経営の本拠地として、また、半永久的な権威の象徴として築城された。これによって、戦国時代の築城方法を研究する「築城学」が誕生する。これは、軍隊の攻撃・防御法を研究した「軍学」や「兵学」の中の一分野であった。築城学は、各地に残る中世城館跡を計測した絵図を作成し、それを元に研究されたが、これは、近現代の陸軍に継承された。さらに陸軍で使われた歩測を元に描く縄張図の描写法は現代の縄張図(概念図)へ継承されている。しかしながら、本来城の攻防戦を想定した「軍学」の範疇であるため、城郭研究は軍事史的側面の研究が主であった。

遺物研究については、江戸時代には武家のしきたり・法令・衣服・古典等を研究する「有職故実」や、動植物・鉱物等を対象としたいわゆる博物学「本草学」が盛んとなり、「好事家」と呼ばれた町人学者は多くの「もの」を収集してスケッチした書物を発行し、貨幣や刀剣や陶磁器などの中近世の遺物を扱ったものも多かった。これらは現代の考古学に継承されている。

2. 明治・大正～第2次大戦

文献研究では、『房総叢書』(1912年～)で、江戸時代の軍記物も含めた史料集が県によって収集・刊行された。また、個人研究では、大野太平氏の『房総里見氏の研究』(1933年)^{④-006}は現在の里見氏研究の基礎となっている。

城郭研究については、明治初期に安川柳溪氏の『上総国誌』^{①-001}(1878年)が刊行され、大正時代には『印旛郡誌』^{①-003}(1912年)・『市原郡誌』^{①-008}(1916年)・『千葉縣誌』^{①-011}(1919年)・『夷隅郡誌』^{①-017}(1923年)・『東葛飾郡誌』^{①-016}(1923年)・『千葉郡誌』^{①-018}(1926年)等、自治体史が刊行され始めたが、城館研究の分野では城跡の地勢や城主・攻防戦の紹介が主であり、それも江戸時代の軍記物や伝承を記しているものが多く、一次史料に基づくものは少ない。自治体史の章立てで「名勝・旧蹟」として掲載された例が多いことはこれを物語るものであろう。ただ、『君津郡誌』^{①-020}(1927年)等、字名・遺構の形状・面積等を記しているものもある。また、県による『史跡名勝天然記念物調査』^{④-003}(1926年)では、土気城・勝浦城・小弓城等の主要城郭が取り上げられたにすぎなかったが、従来の説明や鳥瞰図の他に地籍図・地形図が取り入れられた。

3. 戦後～1960年代

第二次世界大戦後は現在の城郭研究が歴史学研究の一つとして確立していく直接の過程であるので、方法別に分けて概要を記すことにする。つまり、①縄張り研究、②考古学研究、③文献研究、④歴史地理学研究に大別したい。

(1) 縄張り研究

戦後は更に郷土史研究の気運が高まり、雑誌類に個人の個別城館跡の研究が掲載されはじめ、自治体史は『本納町史』^{①-025}・『銚子市史』^{①-026}・『船橋市史』^{①-028}等、1910年代から続いて各地で刊行された。しかし、これらは戦前と同様、伝承等を紹介するものが多かったと言えよう。しかし、1960年代後半には、縄張図（概念図）を図示して城郭遺構の解説を入れたものが見られるようになり、個人研究論文も多く登場するようになる。縄張図等が図示された例としては、小室栄一氏の『中世城郭の研究』^{④-018}（1965年）・大多和晃紀氏の『関東百城』^{④-030}（1969年）・『日本城郭史論叢』（1969年）所収の篠丸頼彦氏の「二つの佐倉城」^{④-029-2}等がある。小室・大多和両氏は千葉県内を含む関東地域の主な城館跡の概念図を掲載し、特に小室氏は実測図の重要性を実践・提言しており、縄張図（概念図）が重要な歴史資料として活用できることを示したと言えよう。

(2) 考古学研究

千葉県内の城館跡を対象として発掘調査された最初の例は、1962年の小金城跡（松戸市）であり、測量調査も実施されているが、幸いに古代集落が残存していたことが発掘調査を可能にしたものであろう。以降しばらくは中近世城館跡の発掘調査は殆ど実施されていない。未だこの段階では、中世城館跡の文化財としての認識は低かったといえよう。この時期の主な発掘調査報告書には、戸張城跡・根戸城跡（柏市）^{③-001}等がある。^{③-003}

(3) 文献研究・(4) 歴史地理学的研究

千葉耀胤氏の館山城跡と城下町に関する書籍が1963,64年に発刊され、大多喜城跡と城下町についての研究が1967年、平野元三郎・渡辺包夫・篠丸頼彦・森輝・川村優各氏により発表されている。^{④-016,017}しかしながら、研究者にとっては未だ関心が薄い時期であった。^{②-034~037}

4. 1970年代

(1) 縄張り研究

個人研究は、1960年代後半以降から引き続いて多く発表された。1969,70年、清川一史氏は県内98か所の縄張図を紹介している。^{②-046}また、1970年代以降は各自治体による調査研究の数が増加し、自治体史において城館跡が概念図を掲載して紹介される例が増える。例えば、篠丸頼彦氏・伊禮正雄氏は1971年、『佐倉市史』^{①-032}において印旛地域を中心に調査した成果をはじめて独立した章立ての中で公表している。

分布論的には、清川一史氏が1971年、下総から上総北部の城館跡の曲輪取りの広さから在地領主層の騎馬軍団的性格を指摘した。^{②-058}伊藤一男氏は「千葉県中近世遺跡調査目録」の調査成果から、県内の中世城郭を占地や「囲郭型式」から「型式分類」し、館から館城へ、山城・丘陵（台地）城から平城への「編年」を県内城館跡で示し、臼井城や坂田城については本城と支城群の関係を図示した（1973,1974,1975年）。^{②-075,082,④-052}氏の曲輪配置の分類によると、単郭で方形・単郭雑形、多郭で同心円・直線連郭・雑形とし、単郭式の砦・

館は香取地方に、直線連郭は香取・東葛飾・千葉・山武に、多郭雑形は君津・印旛・市原に多く分布するとした。伊禮正雄氏も1978年、県内の城址について、①城郭の数が多、②丘陵城郭が多い、③直線連郭を基本型式とする、④曲輪取りがおおまか、⑤二重土塁が少ない、⑥虎口の合い矢構造が特に上総方面に多い、⑦櫓台が活用されている、⑧両総の西北側にすぐれた城郭が多く南方ほど築城術が未発達ないし停顿気味である、等の特色をあげている。これらは、県内全域の城館跡について^{②-106}占地や縄張構造を分析したもので、この時期では非常に評価されるものであろう。しかし、この時点では発掘調査例が少なく、特に時期的な変遷についての立証は1980年代後半以降となる。

(2) 考古学研究

千葉県教育委員会による『千葉県中近世遺跡調査目録』^{④-038,041}(1971,72)は1960年代後半からの調査集成であるが、城館跡が考古学の対象つまり埋蔵文化財として認知された証拠である。1970年には松子城跡(大栄町)の発掘調査が行われたが、トレンチ調査と簡単な概念図を主体とするものであった。以降しばらくは城館跡の発掘調査はトレンチ調査が中心で面的な調査は少ない。これは、中近世の考古学への認知の有無の他に、福井県一乗谷の山上の「一乗城山」と谷内の「朝倉館」に代表され教科書にも叙述された様に、多くの中世城郭のイメージが「いざというときに立てこもる臨時的な場所であり、常時生活していたのではないから建物も遺物も少ない筈」というものであったからではないかと考えられる。この誤解は以降1990年代の城館跡の発掘調査増加に伴って修正されてきたと考えられる。

なお、学術調査による地形測量は、大椎城跡が千葉市教育委員会により実施され、1972,1973年後藤和民氏^{②-062,071}によって公表された。また、立教大学考古学研究会は1976年、大野城跡(夷隅町)の調査報告書を刊行^{③-040}した。

1970年代の開発に伴う主な発掘調査は、国立歴史民俗博物館建設に伴う佐倉城跡(佐倉市)、13世紀から15世紀の遺物が多く出土した池ノ尻館跡(四街道市)、船尾城跡(印西町)、城の腰城跡・武石館跡(千葉市)、県立総南博物館建設に伴う大多喜城跡(大多喜町)、大野城跡(夷隅町)、市立博物館建設に伴う久留里城跡(君津市)、県内最初に沖積地の館跡が検出された菅生遺跡・主郭内から多くの貿易陶磁器が出土した真里谷城跡(木更津市)等である。発行された主な発掘調査報告書は、小金城跡(1970年)、松子城跡^{③-010}(1971年)、佐倉城跡(1971年~1981年)、菅生遺跡(木更津市 1973年)、大多喜城跡(1974年)、小堤要害城跡(横芝町 1976年)、船尾城跡(印西町 1978年)、大野城跡(夷隅町 1978年)、館山城跡(1978,79年)、城の腰城跡(千葉市 1979年)、久留里城跡(君津市 1979年)、真里谷城跡(木更津市 1979年)等がある。また、学術調査では、保存整備のために実施され始めた御茶屋御殿跡(千葉市 1976年)がある。

(3) 文献研究・(4) 歴史地理学的研究

1960年代に続き、1970,1971年、森輝・川村優氏が大多喜藩についての調査報告を行い、篠丸頼彦氏が佐倉城周辺について発表している(1971年)が、未だ城郭に直接関するもの関心が薄かったためであろうか、この時期は他に見るべきものはない。^{②-048,064}
^{①-032}

5. 1980年代

この時期は、全国的に城郭研究が盛んとなった時期で、特に縄張り研究が浸透し、考古学研究や文献史学も城郭研究に深く関わり始めた時期といえよう。

(1) 縄張り研究

『日本城郭体系』^{④-073}は全国の主要城館跡を紹介したものであり、以降、1990年代の各県教育委員会による中近世城館跡詳細分布調査報告書刊行まで、城郭研究のバイブル的存在となった。それまで趣味的に扱われがちであった城郭研究が考古学研究者を含めた歴史学研究者にとってその重要性が認知され始めたのではないだろうか。ただ、同書は未だこの段階では文章のみが多く、図示されても概略図や写真が主で、詳細な概念図（線張図）の掲載例は少数であった。しかし、群馬県については、後の多くの縄張り研究者にとっての模範とされた詳細な縄張り図が既に山崎一氏によって集成されていた（『群馬県古城址の研究』上・下巻（1978年）、補遺篇上・下巻（1979年））ので、突出した感がある。その後、1987年には『中世城郭事典』^{④-104}が発刊され、全国を対象に各県限られた数ではあるが、取り上げた全ての城館跡の概念図を掲載しており、比較検討できる歴史資料としての城館跡概念図が全国的に認識されたと言えよう。千葉県については、21城館跡が掲載されたが、縄張り研究者の詳細な概念図の他に臼井城跡・大野城跡・稲村城跡・岡本城跡については地形測量図が掲載された。また、万喜城跡については地形測量図を参考にした概念図が掲載された。大野城跡は1970年代の立教大学考古学研究会の成果であるが、他は後述する1980年度から始まった千葉県教育委員会の測量調査の成果である。

自治体史においては、城館跡の概念図提示が一般化する。例えば、伊藤一男氏『松尾町の歴史』（1984年）、^{①-063}高橋三千夫氏『印旛村史』^{①-062}、『酒々井町史』^{①-073}（1987年）、小高春雄氏『大網白里町史』^{①-070}（1986年）等である。個々の論考では、1988年の遠山成一氏による東金城跡の概念図提示と考察^{②-168}がある。

(2) 考古学研究

盛んな開発行為と埋蔵文化財行政の進展、そして中近世城館跡が埋蔵文化財として一般にも認知され始めたことによって、千葉県内では多くの城館跡の発掘調査が行われた。県内の発掘調査組織は、かつては財団法人千葉県文化財センターと民営組織であり、教育委員会の多くは大学等の機関や有識者に「調査団」として調査を委託したが、この時期、広域法人による郡市文化財センターが充実したこともある。

開発に伴う主な発掘調査は、本佐倉城跡の外郭部に位置して中世末期の墓域や集落域が検出された北大堀遺跡・上宿遺跡や長勝寺脇館跡（第39図・図版6-2）（酒々井町）、和良比堀込城跡（四街道市）（第38図・図版6-1）、南敷城跡・馬洗城跡（大栄町）、菊水城跡（下総町）、一宮城跡（一宮町）、中滝城跡（岬町）、村上城跡（市原市）、真里谷城跡（木更津市）等がある。主な発掘調査報告書は、菅生遺跡（木更津市）^{③-070}、金谷城跡（富津市）^{③-075}、埴谷周路遺跡（山武町）^{③-093,094}、小林城跡（印西町）^{③-098}、一宮城跡（一宮町）^{③-106,107}、真里谷城跡（木更津市）^{③-109}、池ノ尻館跡・戸崎館跡（四街道市）^{③-128}、大羽根城郭跡（市原市）^{③-135}、村上城跡（市原市）^{③-137}、関宿城跡（関宿町）^{③-140,149,158}、南敷城跡（大栄町）^{③-143}、馬洗城跡（大栄町）^{③-160}、外箕輪遺跡（君津市）^{③-164}等があり、意外に豊富な出土遺物と掘立柱建物跡等の遺構の検出によって、城館内の生活について良好な研究資料が蓄積され始めたと言ってよいであろう。

多くの調査の内、中近世城館跡の資料としての意識普及に果たした役割の大きなものとして、1980年から1998年まで県教育委員会によって行われた測量と若干の発掘調査がある（重要遺跡確認調査）。これは、重要性が高くかつ開発の影響を受けるおそれがある中近世城跡を選び、その規模・構造等を把握し保存策を講ずる資料を得るために実施された。以下、1980年代のこの調査を列挙する。1980年 本佐倉城跡（酒々井町）・佐貫城跡（富津市）、1981年 森山城跡（小見川町）・本納城跡（茂原市）、1982年 大友城跡（東庄町）・坂田城跡（横芝町）、1983年 稲村城跡（館山市）（第157図）・臼井城跡（佐倉市）、1984年 大崎城跡（佐原市）・万喜城跡（夷隅町）、1985年 佐是城跡（市原市）・岡本城跡（富浦町）（第163図）、1986

年 飯櫃城跡（芝山町）（第95図）・籙木城跡（干潟町）（第70図）、1987年 飯野陣屋跡（富津市）（第150図）・山崎城跡（佐原市）（第65図）、1988年 東金城跡（東金市）（第97図）・城山城跡（千葉市）（第47図）、1989年 大堀城跡（八日市場市）（第77図）・椎津城跡（市原市）。この一連の調査は、学術的には城館跡の規模・構造等の客観的資料としての地形測量や小面積ながらも築城方法や時期等が解明される発掘調査の重要性が、埋蔵文化財行政的には調査の継続性等が、全国的にも評価されるものであろう。

他の学術発掘調査としては、自治体（教育委員会）による佐倉城跡（佐倉市）、八木ヶ谷城跡（船橋市）、根戸城跡（我孫子市）、小見川城跡（小見川町）や臼井城跡研究会による臼井城跡（佐倉市）、立教大学考古学研究会による中滝城跡（岬町）等があり、測量調査には、中滝城跡の他、自治体（教育委員会）による米本城跡・高津城跡（八千代市）、小竹城跡・臼井城跡・岩富城跡・城城跡（佐倉市）等がある。

考古学的視点による論考については、発掘調査例が増加したこともあってようやく登場する。橋口定志氏は1980年、大野城跡の調査成果から1615年の一国一城令に伴う「城割」の可能性を示唆し、柴田龍司氏は1986年、国道296号線や重要遺跡の調査成果から本佐倉城や臼井城の「惣構」構造を指摘し、1987年、外郭部の規模を分類して個々の城郭機能を明らかにしようとし、さらに1988年、房総の戦国期城下集落について分類した。発掘調査例を分類・検討する柴田氏の方法は城館研究に考古学的視点を取り入れた県内最初の例であろう。また、鳴田浩司氏は1989年、県教育委員会で調査した飯野陣屋跡の出土陶磁器について考察しているが、東京における江戸遺跡の調査・研究が進展し始めた時期であり、千葉県内においても近世考古学の必要性が指摘され、城館研究の面でも縄張り構造論だけでなく遺物研究の重要性が示唆されたと言ってよいであろう。

(3) 文献研究・(4) 歴史地理学的研究

1980年代後半、ようやく文献史学分野から城館を視点とした研究が多く登場する。井上は1988年、中世の文献史学研究が積み上げてきた領主制論や村落論を城郭研究に取り入れるべきことを目的として領主権力からのみの視点からではなく、民衆からの視点として「村の城」の存在を提唱し、齋藤慎一氏は恒常的な城は15世紀半ば以降に多く登場することを立証し、市村高男氏は1988年、「根子屋」の性格を検討し、16世紀後半に登場するとした。県内については、外山信司氏は1988年、『本土寺過去帳』等の史料に登場する「サクラ」（佐倉）地名や「サクラ」で死去した人々の階層に着目し、戦国末期の本佐倉城下に居住した家臣団が千葉宗家直臣層にほぼ限られることを明らかにし、遠山成一・外山信司氏は1986年、岩富原氏の動向を明らかにし今後の岩富城研究の基礎を築いたこと等があげられる。

(5) その他

1986年、東京で「全国城郭研究者セミナー」が開催され以降毎年実施されており、翌年から『中世城郭研究』の発行が始まり、千葉県内の城館跡を対象にした論考も多く載るようになる。中近世城館研究が全国的に認知され始めたと言えよう。また、県内でも、縄張り研究だけではなく考古学・文献史学等他分野を含めた研究を目指して埋蔵文化財関係者、教員等を中心に1985年「千葉城郭研究会」が発足した。そして、1989年『千葉城郭研究』第1号が発刊され、以降隔年で発刊されている。1号は「城郭からみた千葉県の中世史」・「研究史」・「文献目録」で構成され、研究史・文献目録は以降各号で追加されている。縄張り構造に懲り散策等の懐古的趣味に走らず純粋学問的な地域の「城郭研究会」設立は全国的には恐らく初めてあり、内容的にも評価されたと言えよう。

6. 1990年代

全国的に中世城館研究が盛んとなり、各地で様々なテーマのシンポジウムや研究集会が開催され、一般向けの単行本・雑誌も多く出版されるようになる。研究方法としては、縄張り研究中心から、全国的な城館跡発掘調査例の増加に伴い次第に考古学研究が主流となってくる。

(1) 縄張り研究

千葉県教育委員会によって県内外の城郭研究者が集められ、1990年度から県内中近世城館跡の新規発見を含む分布調査と主要城館跡の概念図作成が開始され、1995年『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ－旧下総国地域－』^{③-245}、1996年『同書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』^{③-263}が刊行された。4か年度の調査によって、中世城館跡967か所、近世城跡・陣屋跡・砲台跡90か所の合計1,057か所が確認され、1988年の『千葉県埋蔵文化財分布地図』段階では817か所であったので、240か所の新発見があった訳である。同書の特徴としては、未作成であった大規模城郭を中心とする精緻な縄張図（概念図）が184か所と数多く掲載されたこと、関係史料一覧が掲載されたこと、『同書Ⅱ』で、市村高男氏の「房総における中世城館跡の地域的、年代的分布とその特徴」、小野正敏氏の「出土陶磁よりみた千葉の城館」が掲載され、前者で縄張り・文献・分布論が、後者で遺物論がまとめられたこと等がある。こうした充実度は、同時期多くの県外教育委員会で進められている詳細分布調査報告書に比べ出色の出来と考えられる。しかし、時間的・予算的制約から、小規模城館跡の掲載が少ないこと、発掘調査成果が少ないこと、調査担当者による全体のまとめがないこと等があげられる。

縄張図（概念図）の集成としては、個人によるものが2点ある。小高春雄氏は長生地域の中近世城館跡の概念図32城跡を集成して自費出版し（1991年）^{④-116}、1995年他界した清川一史氏の遺稿集が1998年刊行され、74城館跡の概念図が掲載された。^{④-146}

その他、個人の業績では、八巻孝夫氏は1990年、後北条氏領国の「馬出し」について考察し、千葉県内では新村城跡（八日市場市）・津辺城跡（成東町）・森山城跡（小見川町）・土気城跡（千葉市）・箕輪城跡（沼南町）^{②-190}について縄張図を提示しながら考察した。池田誠氏は、1997年、上総・下総の馬出・杵形・ライン防御・櫓台・二郭構造を有する城郭が、徳川家康家臣による天正20年頃の築城とする説を出したが、^{④-355}縄張り構造の視点のみではなく、文献史学や考古学の成果を踏まえる必要があろう。

(2) 考古学研究

1980年度から開始された千葉県教育委員会による城館跡の測量及び確認発掘調査は、平成2年(1990)度から発掘調査が無くなり、測量調査と周辺の中近世景観復元等を含めた調査となった。以下列举すると、1990年 中島城跡（銚子市）（第83図）・鹿渡城跡（四街道市）（第33図）、1991年 峰上城跡（富津市）、1992年 鶴ヶ城跡・亀ヶ城跡（岬町）、1993年 土気城跡（千葉市）・池和田城跡（市原市）、1994年 造海城跡（富津市）（第147図）、1995年 真名城跡（茂原市）（第113図）、1996年 助崎城跡（下総町）（第72図）、1997年 増尾城跡（柏市）（第16図）・佐津間城跡（鎌ヶ谷市）である。

発掘調査については、1980年代後半から注目される調査例が増えたが、その成果の一部は1990年、千葉城郭研究会・千葉歴史学会共催で国立歴史民俗博物館において開催された講演会「発掘された房総の中世城館跡」で一般にも公開された。大野城跡（夷隅町）・岩川遺跡（長南町）・金谷城跡（富津市）・下ノ坊遺跡B地点（鋸南町）・長勝寺脇館跡（酒々井町）の調査報告がなされ、小野正敏氏は出土陶磁器について城館や曲輪のタイプによる在り方の検討の必要性をあげ、以降の考古学研究の指針となった。これらは、翌

②-203, 204, 206, 208~210
年『千葉史学』にまとめられた。

1990年代は城館跡に関する考古学研究の進展が著しいので、以降は1990年代を前半と後半に分けて説明したい。

1990年代前半の発掘調査の中で、開発に伴い比較的広範囲な調査が行われた例としては、小林城跡（印西市）（第22図・図版1, 2）、石川館跡・本佐倉大堀遺跡（佐倉市）、東和田城跡（成田市）（第29図）、生実城跡（図版7-2）・南屋敷遺跡（第44図）（千葉市）、鴛崎城跡（佐原市）、久井崎城跡（大栄町）（図版8-2）、武田砦跡（神崎町）、多古城跡（多古町）、篠本城跡（光町）（第76図・図版9-1）、小野城跡（東金市）、田向城跡（芝山町）（図版9-2）、分目要害城跡（市原市）、笹子城跡（木更津市）（第139図・図版11-1）、飯野陣屋跡（富津市）、等がある。城域のほぼ全体にかかるものも多く、貴重な資料を得られた。

1993年から開始された篠本城跡（光町）の発掘調査は大きな成果をもたらした。同城跡は地表面観察では土塁も堀も殆ど確認できない状況であったが、斜面には腰曲輪が巡り、台地上は空堀で区画された中に掘立柱建物跡が密集して検出された。遺物からは、城本体が14世紀初頭から始まり、15世紀前半が最盛期であり、15世紀末から16世紀初頭に廃絶したことが明らかとなった。注目すべき点は、台地上の区画には、高低差や建物跡の差がなく、一般の城に見られる郭の差（江戸時代の城では本丸・二の丸・三の丸等の違い）が見られない点がある。1995年、シンポジウム「よみがえる篠本城跡」で、調査成果（道澤明氏）、中世篠本郷の村落（伊藤一男氏）、出土遺物（小野正敏氏）、東総地域の中世城郭（椎名幸一氏）、房総の中世城館の構造（柴田龍司氏）、篠本城跡出土の仏教遺物（橋浦芳朗氏）、栗山川流域の中世城館跡（遠山成一氏）の講演が行われた。^{④-130}ここで議論となった点として、中世篠本村全体が山に移動して「村の城」を形成したという柴田氏に対して、井上自身疑問に思うのは、笹子城跡でも同様であるが、中世村落全体が宗教的施設や耕地をはじめ、様々な既得権を複雑に持つ村から村人全員が移動できたかということである。むしろ、掘立柱建物跡の規模等から推測すると、台地上には農村内でも上層部の名主クラスが入ったのではないかと思われる。その後、支谷部さらに支谷を挟んだ対岸の台地も調査され、同時期の集落や墓域が検出されたが、台地上の建物規模よりも小規模なもので、これらが一般農民集落ではないかと考えられる。とするならば、確かに村全体が移動したのかも知れないが、台地上と周辺部の階層差が表われていると考えたい。

1990年代前半は、良好な発掘調査例の増加により、考古学による城館の変遷に関する論考が多く登場する。柴田龍司氏は1991年、館と城の時期から館城への展開に代表される城館における15世紀半ばの画期を提示した。^{④-119-1}また、同氏は1992年、堀込城跡（四街道市）・南敷砦跡（大栄町）・椎津城跡（市原市）・臼井城跡（佐倉市）・生実城跡（千葉市）の発掘調査例から、堀や曲輪から出土する石塔類が「城割り」行為によるものとした。^{②-238}また、吉田博之氏は1993年、大須賀氏系列城跡の発掘調査から、本城松子城（大栄町）から遠い鴛崎城（佐原市）・武田砦（神崎町）は日常生活痕跡は薄く16世紀前半に廃城するが、近接する久井崎城・馬洗城（大栄町）は日常生活痕跡が濃く16世紀後半まで存続し、16世紀後半に在地城が廃棄され本城周辺に集まる可能性を明らかにした。^{②-250}1993年には、柴田氏・笹生衛氏他によって中世遺跡発掘調査例が集中した小櫃川流域遺跡の調査概要と変遷がまとめられ、中世前期に成立した集落が15世紀に廃絶し以降の集落は集村化し近世に連続すること、16世紀前半の城郭には日常生活空間があり城郭と集落が一体化したものであるが、後半はより軍事性を重視した施設へ変化すること等が指摘され、今後の城館研究は中近

世遺跡全体の中で行われるべきであるという視点が既に提示されている。集落との関係では、柴田氏は1994年、戦国期前半には集落と一体化した構造の城郭がある（村落型城郭＝笹子城先端部・埴谷周路遺跡・池ノ尻館跡）が、戦国期後半には惣構構造の城郭が登場（都市型城郭＝本佐倉城跡・臼井城跡・馬洗城跡）し、集落一体型城郭の多くが廃城になることを打ち出し、1995年には県内中世城館の変遷を概観した。また、井上は1995年、小林城跡の調査成果から改造・「破城」行為に着目し、15世紀から16世紀にかけての同城について、村の墓域→方形単郭館→腰曲輪造成→城割による堀の埋めたて（廃城）という変遷を明らかにした。これらは、「もの」の時期的変化から歴史を構築するという点、正に城郭研究法の主力が考古学に移行してきたことを意味すると考えられる。1994年、当センターによる『房総考古学ライブラリー 8 歴史時代(2)』が刊行された。井上は、柴田氏と同様に城館の変遷や県内地域毎の主要中世城館跡の特色を概略し、鳴田浩司氏は近世城館跡の調査成果を提示したが、これが千葉県内中近世城館跡の考古学的成果をまとめた最初であろう。

1990年代後半の主な発掘調査例としては、北ノ作遺跡・館ノ山遺跡（四街道市）、高品城跡（千葉市）（第48図・図版7-1）、松尾城跡（松尾町）、富津陣屋跡（富津市）（図版12-1）、西郷氏館跡（鴨川市）（図版12-2）等がある。北ノ作遺跡では、斜面も含むほぼ全域が発掘調査されて斜面部の整形が確認され、15世紀末から16世紀前葉の建物群・障子堀・大規模井戸等が検出された（第37図・図版4, 5）。同遺跡に近い館ノ山遺跡は、空堀で区画されながらも15世紀前半を中心とする屋敷跡が検出され、篠本城跡の小型タイプの様相を示す（図版3）。また、富津陣屋跡（富津市）や松尾城跡（松尾町）の発掘調査は幕末から近代にかけての調査例として注目されるものである。また、北大堀遺跡をはじめとした本佐倉城跡（酒々井町）周辺の遺跡発掘調査報告書が続々刊行され、今後の「惣構研究」の進展が期待される。

最近の個人研究では、発掘された遺構に関しての研究は未だ少ないが、池田光雄氏は1996年、「堀内部障壁」について千葉県内の発掘調査例を紹介し、従来後北条氏系列の城館に造られる施設と認識されていた「障子堀」や障壁が在地土豪のオリジナルである可能性をあげ、井上は、1998年、千葉県を中心に全国の調査例から堀内部障壁を分類し、既に15世紀前半には各地で障子堀が登場し次第に発展進化したことを明らかにした。また、眞嗣史氏は1997年、君津地域の中近世遺跡調査例の存続期間を出土遺物から集成したが、16世紀後半の遺物が検出される例が少ないことを明らかにした。この空白は集落の移動や城館の機能分化の問題を含むもので、県内他地域でも同様な傾向である。遺物論では、笹生衛氏は1991年、従来空白であった房総の中世土器（カワラケ）編年を提示し、以降の指針となった。また、藤沢良祐氏は、『瀬戸市史』（1993年）で瀬戸・美濃窯の古瀬戸後期様式（15世紀後半）から大窯5期（17世紀前半）の製品が出土した千葉県内の23遺跡（内城館跡18か所）を表で取りあげ、遺跡ごとの盛衰を集成している。

1998年、現在の県内中世遺跡研究の到達点として、新編千葉県史ともいえるべき『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』が刊行された。年代推定基準としての土器・陶磁器の編年が示され、多くの県内埋蔵文化財担当者によって各地の中世遺跡の考古学的調査成果が集成された。千葉県は中世遺跡調査例が多いが、これだけの集成は自治体史としては出色の出来であろう。また、城館研究にとっては、縄張り構造主体の集成であった『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書』（1995, 1996年）の考古学的成果を補完し、従来の自治体史のスタイルである縄張り研究や文献史学による叙述に対し、集落や墓域等も含めた中世遺跡全体の中で研究すべきであるという視点が見られ、今後の城館研究（中近世考古学）の主流となるものと言えよう。そういった例として最近では、笹生衛氏が1999年、14世紀後半と15世紀後半の村落構造・景

観の変化に着目して城館との関連を考察している。^{②-375}

(3) 文献研究

千葉歴史学会中世史部会が作成した論文集『中世房総の権力と社会』^{④-112} (1991年)では、直接城館に関わるものはないが、後北条氏権力の関宿城や本佐倉城支配について、長塚孝氏・黒田基樹氏・外山信司氏によって考察されている。また、滝川恒昭氏は従来にない視点として「海城」・「湊」等の水上交通に着目した^{②-251,278,279,353} (1993,1994,1997年)。考古学と合わせた研究としては、柴田龍司氏が1992年、東国の中世史料上に登場する「曲輪」を検討し、主郭部に含まれない区画であったこと等を明らかにした。^{②-239}

(4) 歴史地理学的研究

近年は交通の視点で城郭を見直す論考が出ている。文献史学の項でも取り上げた「海城」の他、遠山成一氏は、陸上交通や、「舟戸」・「船津」地名に注目して水運について集成し^{②-268,269} (1994,1996年)。外山信司氏も1997年、高品城跡 (千葉市) について陸上交通の面から検討している。^{②-340}

7. 今後の課題

縄張り研究に関しては、資料としての縄張り図 (概念図)・測量図等が集成されてきたので、比較・検討が必要である。特に、従来の漠然としたイメージではなく、数値化したデータによる比較・検討が必要であろう。

考古学研究に関しては、まず、発掘された遺構群の比較・検討が殆ど行われていないので、今後必要であろう。具体的には、空堀・土塁・掘立柱建物跡・門跡・土坑・地下式坑等である。また、遺物については、貿易陶磁器・瀬戸美濃・常滑・渥美等の搬入品の編年は深化しているものの、カワラケ・瓦質土器 (播鉢・内耳鍋) 等の在地土器の地域を細分した編年研究が必要である。今後最も必要な課題は、16世紀後半の問題である。つまり、文献史料上、または縄張り構造上、16世紀後半から末まで機能していたと推測される城館に当概期の遺物群の出土が少ないことである。これは、遺物の出土がなく生活痕跡が見られなくなることは、①大規模城郭に取り込まれて廃城となったのか、②機能が変化し常駐しない城となったのか、の二とおり考えられるがいずれなのかを各城館跡で検討しなければならない。なお、この時期東国において瀬戸美濃製品の搬入量が減少することとも関連するが、中近世全般の時期ごとによる搬入陶磁器の搬入量や在地土器の生産量も含めて考えるべきものであろう。さらに、重要な視点としては、城館跡に限るのではなく、中近世遺跡全体の歴史的変動の中で検討する必要があるであろう。

文献史学、歴史地理学研究に関しては、従来通り個別城館跡の検討が必要であるが、例えば、江戸時代の軍記物の検討や城館関連地名のマクロ的検討等が可能であろう。

以上、方法論別に課題を記したが、補完しながらの総合的な研究は既に開始されており、今後更にその必要性が求められるものであろう。本書は、以上の様々な課題に近づける様、縄張り構造等のデータ化、遺構の分析、在地土器の編年を試みたものであるが、今後の研究の叩き台となれば幸いである。

第1章 城館の構造等について

井上哲朗

第1節 データについて

1. はじめに

千葉県内の中近世城館跡の内、概念図や測量図が作成され、それが報告書・雑誌・単行本等の印刷物によって公表されているものを対象とした。したがって、県内全域の城館跡約1,000箇所全てではなく、発掘調査が行われて大きな成果があっても、過去に破壊される等の結果、全体の縄張り構造が不明なものは除外した。第3表 千葉県内中近世城館跡構造・地名・時期等データの計測等に使用した主な文献は以下の通りである。

- ・千葉県教育委員会『千葉県中近世城跡研究調査報告書』第1集 (1981年) ～第18集 (1998年)^{③-074,083,092,113,137,145,155,162,174,187,203,221,232,241,260,281,291}
- ・小高春雄『長生の城』 (1991年)^{④-116}
- ・千葉県教育委員会『千葉県内中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ-旧下総国地域-』 (1995年)^{③-245}
- ・千葉県教育委員会『千葉県内中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ-旧上総・安房国地域-』 (1996年)^{③-263}
- ・千葉県『千葉県の歴史 資料編 中世1 (考古資料)』 (1998年)^{①-091}
- ・その他、各城館跡発掘・測量調査報告書

以下、データ計測方法や留意点等を記して表の凡例としたい。

なお、地域区分と市町村番号については第5図を参照されたい。第6図～第11図は、1/20万の城館跡分布図であり、図中の番号は第3表及び第12図～第164図中の各城館跡に付した番号に一致する。第3表の並び順は、①地域 (A～K)、②市町村番号 (1～81)、③曲輪面積 (大→小) とした。

2. 立地

地形区分は、丘陵地形・台地地形・低地の3区分とした。丘陵と台地の区別は、比高があり山上は尾根沿いに狭い平場を持つものを丘陵、比高がなく山上に比較的広い平場がある地形を台地としたが、千葉県内の丘陵・台地の境は比較的わかりやすい (第4図参照) とはいえ、主観的な判断も強い。低地は、いわゆる沖積地や台地や丘陵の下部 (裾部) である。地形内位置は、丘陵・台地地形のうち、城跡が占地する範囲が先端部か内部 (奥) か、先端部から奥 (広域に広がる) かで分けた。低地の沖積地の城館跡については、仮に内部 (奥) に分類した。比高は、基本的には周囲の水田面から主郭面までの高さとしたが、周囲の水田面の計測位置により差があるため、特に丘陵の城郭では数mの誤差がある。

3. 曲輪数・曲輪面積

主要郭は、基本的には山上の比較的広い平場が相当する。主郭は、縄張り構造上、攻撃され、また防御の際、最終的に行き着くと考えられる平場 (最終的な詰めの部分) で城主クラスの駐屯地区または居住区でもありと考えられる部分、Ⅱ郭・Ⅲ郭・Ⅳ郭等は、それに準ずる平場で家臣団クラス以下の駐屯地区と想定した。主郭は、中世では「実城」・「御城」等、江戸時代は「本丸」と言われ、それに準ずる郭は、中

世は「中城」・「一曲輪」等、江戸時代は「二ノ丸」・「三ノ丸」等と言われる。他の主要郭は、山上ではあるが、防御上の優先順位が低いもの、腰曲輪は斜面に造成された平場である。ただ、丘陵の城郭では、山頂ではなく、斜面に造成された平場が主要郭となる場合が多い。外郭部は、主要郭の外側に位置する広い平場部分で、土塁等の明確な遺構が見られない場合もあるが、戦略上、城域に含めた方がよいと考えられる地区で、機能的には城下町衆や百姓等の避難区域或いは足軽や馬の駐屯地と考えられる地区である。ただ、本佐倉城や佐倉城などの城下町域を含む「惣構」は、外郭部としては表中には含んでいない。曲輪の数や面積合計については、従来、 $\bigcirc\text{m} \times \bigcirc\text{m}$ と測定されていた城域面積が、斜面部を含むので、例えば丘陵の城郭面積が台地の城館に対して膨大となってしまうのに対し、より城郭規模や城主階級の比較判断材料となるものであろう。なお、面積測定にはプランメーターを使用したがる、概念図の精度の問題で、1の位、場合によっては10の位を四捨五入した。

4. 堀

堀には堀切・横堀・縦堀等の種類がある。堀切は尾根や台地の上を切るもの、横堀は斜面のコンタに平行になるように切るもの、縦堀は斜面のコンタに対して垂直になるように山上から下に切るものである。横堀の数については、一部埋もれているものもあり、堀切と連続して曲輪を巡らすものが多いので、各曲輪に対するセットの数を数えた。なお、長さについては、埋もれているものも多い筈なので、明らかに埋没していると推定できるものは、その長さに含めた。

5. 土塁

土塁も堀同様、破壊されて一部しか残存していないものもあるが、明らかに存在したと推測されるものについてはその長さに含めた。土塁状尾根については、丘陵の城郭に多く見られるもので、馬の背状の尾根頂部を残し、直下から数m下の斜面に平場を造成することによって、尾根筋が平場（曲輪）間の通路を含む土塁的機能を有すると推測されるものである。

6. 特殊構造

城郭構造の発展や領主による差異を検討するものとして、折れ歪み数・枳形虎口数・馬出し曲輪数を入れた。折れ歪みについては、鍵の手状の2回折れを1として数えた。なお、丘陵城郭では、尾根と谷による自然地形に沿った形で造成されて直線的ではなくても平場が折れ歪み状となる場合が多く、限りなくなってしまうので、基本的に空堀に伴うものとした。ただ、空堀は斜面による障害を造り出す施設であるので、比高があり斜面の傾斜がきつい丘陵城郭では少なく、比高のない台地城館では多く見られるので、丘陵城郭ではデータに表れない平場の折れ歪みは多い。つまり、同地形であれば数の違いは城主の階層・城の機能・時期等を表す指標になるが、異地形間の比較については留意しなければならないだろう。枳形虎口については、近世城郭の様に直線的に土塁を配置して明確な枳形空間を造り出したものと、曲輪の虎口外側に存在する空堀の片方を虎口付近で折り曲げて片矢構造としているものを、枳形空間を意識しているものとして不明確な枳形虎口に分けた。なお、合い矢構造のものは明確な枳形虎口として捉えた。

7. 地名

城館跡内または周辺の字名・通称地名・屋号等のうち、頻繁に見受けられる「掘之内」・「要害」・「城山」・「根小（古）屋」・「宿」の有無を記し、他の地名も掲載した。「根小屋」の機能は、山上の「詰め」部分とセットになる常駐地区で16世紀後半に多く現れる名称と考えられている。しかし、近年の発掘調査では、山上の曲輪内でも多くの建物跡や遺物が検出されて生活痕跡が確認されており、「根小屋」の機能は再検討される必要が出てきたと言えよう。また、「宿」は城下町の原初的形態と見られることから、それらが縄張構造や発掘調査例と合わせて検証できるか試みたものである。ただ、今回取り上げた城館跡は全体構造等がわかるもののみであるので、城館関連地名としてのデータは不足と言える。

8. 発掘調査遺物時期

県内の発掘調査事例と瀬戸・美濃編年から、①12世紀～14世紀前半、②14世紀後半～15世紀前半、③15世紀後半～16世紀初頭、④16世紀前葉～中葉、⑤16世紀後半～17世紀初頭、⑥17世紀前葉～19世紀の6期に分類した。①と②の境は、集落の景観が散村から集村化し古瀬戸後期の遺物が出土し始める14世紀後半を一つの画期と考えた。②と③の境は、山上（丘陵・台地上）の城館跡に古瀬戸後IV期～大窯1期までの製品が出土する例が多いので一つの画期と考えた。④は大窯1・2期で、房総内部での国人領主間の勢力紛争期にあたり、⑤は大窯3・4期の出土遺物が検出されたもので、遺物の年代的には近世初頭まで連続する傾向がある。後北条氏による両総支配が行われた16世紀半ばから幕藩体制が確立していく時期である。

9. 伝承

主に近世軍記物を元に著された『上総国誌』（1877年）や『千葉縣誌』（1919年）等を参考とした。一次史料の少ない東国においては、近世初頭に書かれた史料は当然のことながら、伝承もまた参考史料となろう。また、全く伝承も存在しない城館跡もそれなりの意味があると考えられる。

10. 確実な史資料からと推測

城主・攻防等は、第一次文献史料や発掘調査成果から推定される城主や城館の機能について記した。時期区分としては、以下の様にI期～III期が中世、IV期・V期が近世の5期に分類した。

I期（12世紀～15世紀前半） 鎌倉時代・南北朝時代・室町時代前期。

II期（15世紀後半～16世紀初頭） 戦国時代前半、国人領主間の勢力争いの時期。

III期（16世紀前葉～16世紀末） 戦国時代後半、後北条氏の両総侵攻と支配及び里見氏の対抗の時期。

IV期（16世紀末～17世紀初頭） 徳川家臣団の入部と幕藩体制確立期。

V期（17世紀前葉～19世紀） 幕藩体制充実期から幕末の対外国船対策・廃藩置県までの時期。

発掘調査出土遺物による区分より1時期少ないのは、城館跡における遺物出土が少ないのでまず①と②を合わせてI期とした。また、④（16世紀前葉～中葉）と⑤（16世紀後半～17世紀初頭）については、全面的な発掘調査をされていないものが多いこと、16世紀後半に常駐しない（遺物を伴わない）城が現れた可能性があること等から細分が不可能なものが多いので、16世紀前葉～16世紀末をIII期としたことによる。

城・城主クラスについても確実な文献史料や発掘調査成果等を元にしたが、資料を有しないその他の多くの城館跡については、規模・構造・地名・伝承等から類推したものである。つまり、表中の時期と城・

城主クラスの比定の多くは、底章第3節研究史概要で紹介した、主に1980年代後半以降現在までに解明されつつある千葉県内中近世城館の発展過程に基づいて、井上が推測した仮定である。城・城主クラスの分類は次の通りである。

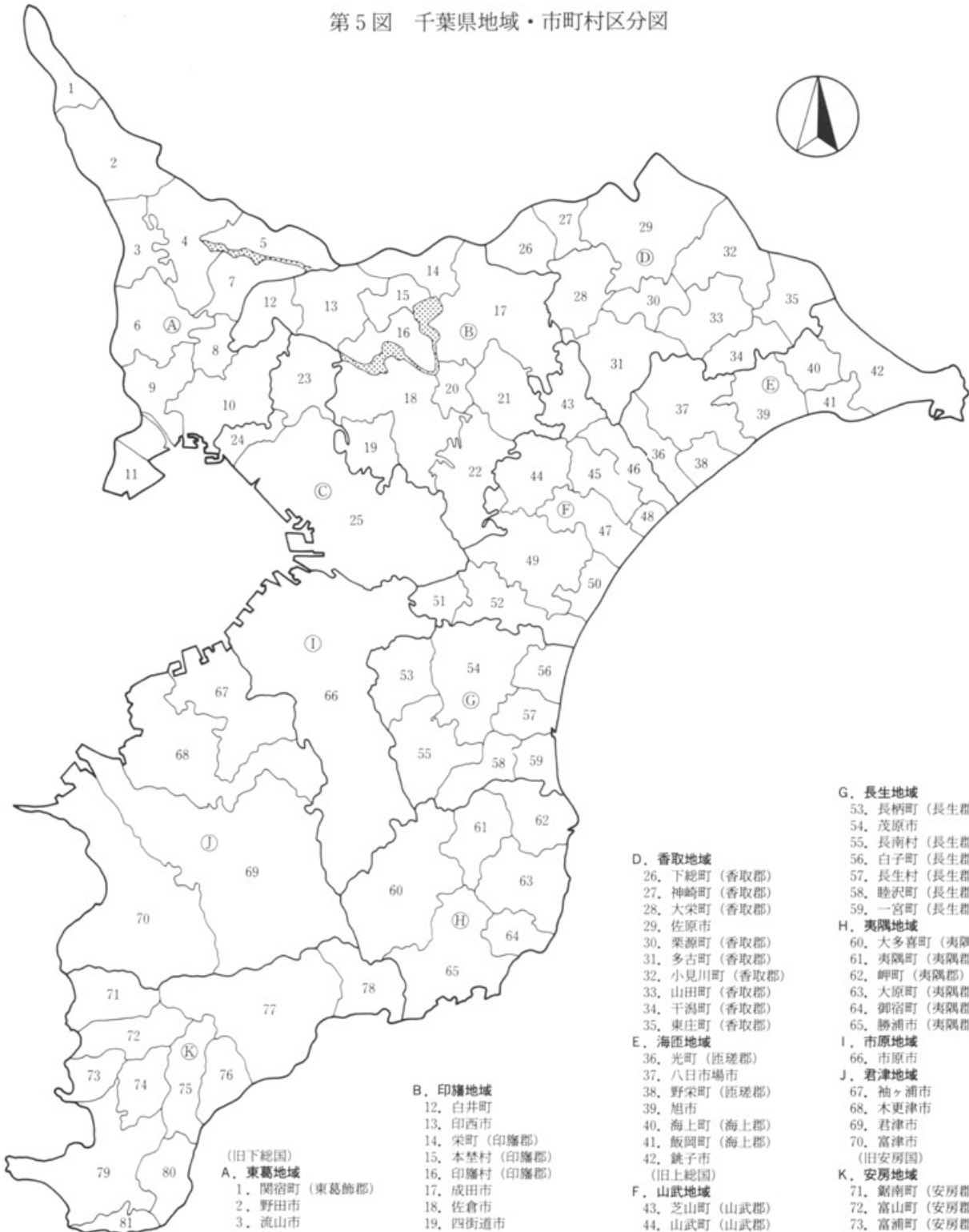
- Aクラス 一国以上の領域を持つ戦国大名（千葉宗家・里見氏）の本城
- Bクラス 一郡～数郡程度の領域を持つ国人領主層・戦国大名被官
（高城・原・大須賀・国分・酒井・正木・武田氏等）の本城＝戦国大名の支城
- Cクラス 現市町村規模の領域を持つ国人領主重臣層の本城
- Dクラス 数村規模の領域を持つ在地領主層の城
- Eクラス 一村程度の領域を持つ小領主層・上層農民層の城

この仮定による地域、時期、城・城主クラスの分析がどの様に表れるかを第2・第3節で検討していきたい。

11. 概念図・測量図について（第12図～第164図）

計測してデータ表に掲載した城館跡の概念図・測量図については、なるべく多く掲載したが、紙数の都合上全ては収録していない。スケールは、1/2,500と1/5,000を基本としたが、発掘調査全体図は1/500・1/1,000のものもある。各城館跡の主郭・II郭・III郭・その他の主要郭・腰曲輪・外郭部・空堀・土塁・土塁状尾根等は、計測の前にまず、図上で判断して色鉛筆で塗り分ける作業があった。その際、特に主要郭の位置づけは、基本的には各文献・概念図等作成者の判断によるが、井上が変更したものも多く、図中に「I」「II」「III」「外郭」等のキャプションで表示した。

第5図 千葉県地域・市町村区分図



(旧下総国)
A. 東葛地域

- 1. 関宿町 (東葛飾郡)
- 2. 野田市
- 3. 流山市
- 4. 柏市
- 5. 我孫子市
- 6. 松戸市
- 7. 沼南町 (東葛飾郡)
- 8. 鎌ヶ谷市
- 9. 市川市
- 10. 船橋市
- 11. 浦安市

B. 印旛地域

- 12. 白井町
- 13. 印西市
- 14. 栄町 (印旛郡)
- 15. 本埜村 (印旛郡)
- 16. 印旛村 (印旛郡)
- 17. 成田市
- 18. 佐倉市
- 19. 四街道市
- 20. 酒々井町 (印旛郡)
- 21. 富里町 (印旛郡)
- 22. 八街市

C. 千葉地域

- 23. 八千代市
- 24. 習志野市
- 25. 千葉市 (旧山武郡土気地区を除く)

D. 香取地域

- 26. 下総町 (香取郡)
- 27. 神崎町 (香取郡)
- 28. 大栄町 (香取郡)
- 29. 佐原市
- 30. 栗源町 (香取郡)
- 31. 多古町 (香取郡)
- 32. 小見川町 (香取郡)
- 33. 山田町 (香取郡)
- 34. 干潟町 (香取郡)
- 35. 東庄町 (香取郡)

E. 海匝地域

- 36. 光町 (匝瑳郡)
- 37. 八日市場市
- 38. 野栄町 (匝瑳郡)
- 39. 旭市
- 40. 海上町 (海上郡)
- 41. 飯岡町 (海上郡)
- 42. 銚子市 (旧上総国)

F. 山武地域

- 43. 芝山町 (山武郡)
- 44. 山武町 (山武郡)
- 45. 松尾町 (山武郡)
- 46. 横芝町 (山武郡)
- 47. 成東町 (山武郡)
- 48. 蓮沼村 (山武郡)
- 49. 東金市
- 50. 九十九里町 (山武郡)
- 51. 千葉市土気地区
- 52. 大網白里町 (山武郡)

G. 長生地域

- 53. 長柄町 (長生郡)
- 54. 茂原市
- 55. 長南村 (長生郡)
- 56. 白子町 (長生郡)
- 57. 長生村 (長生郡)
- 58. 睦沢町 (長生郡)
- 59. 一宮町 (長生郡)

H. 夷隅地域

- 60. 大多喜町 (夷隅郡)
- 61. 夷隅町 (夷隅郡)
- 62. 岬町 (夷隅郡)
- 63. 大原町 (夷隅郡)
- 64. 御宿町 (夷隅郡)
- 65. 勝浦市 (夷隅郡)

I. 市原地域

- 66. 市原市

J. 君津地域

- 67. 袖ヶ浦市
- 68. 木更津市
- 69. 君津市
- 70. 富津市 (旧安房国)

K. 安房地域

- 71. 鋸南町 (安房郡)
- 72. 富山町 (安房郡)
- 73. 富浦町 (安房郡)
- 74. 三芳村 (安房郡)
- 75. 丸山町 (安房郡)
- 76. 和田町 (安房郡)
- 77. 鴨川市
- 78. 天津小湊町 (安房郡)
- 79. 館山市
- 80. 千倉町 (安房郡)
- 81. 白浜町 (安房郡)